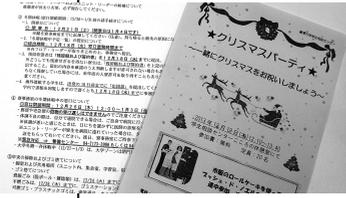


特集 1

寮教育



グローバル人材を育成する 国際寮「グローバル・ドミトリー」

麗澤大学学長 中山 理



78年の歴史と伝統を誇る本学の学生寮

現在、世間では、学生募集やグローバル人材養成のツールとして大学の学生寮がマスコミをにぎわせている。ご多分に漏れず、本学の学生寮も日本テレビの「NEWS ZERO」(平成25年4月2日)で放映された。

一部のマスコミは外国人と日本人が共同生活をす、いわゆる「国際寮」が現在の大学教育のトレンドのような取り上げ方をしていくけれども、本学の「国際寮」は、昭和47年に現在の別科日本語研修課程の前身である「麗澤日本語学校」が開校されて以

来、40年以上も外国人留学生と共住する国際寮としての歴史と伝統を誇っている。学生寮自体の歴史はそれよりもさらに37年も古く、本学の前身の道德科学専攻塾が創立された昭和10年にまで遡る。

本学にとって学生寮は単なる学生の生活の場ではない。創立者廣池千九郎が専攻塾本科規則に「全学生を寄宿舎に入寮せしめ、日夜、知徳一体の教育を行い、各人の最高人格を完成せしむ」(第11条)と述べているように、全寮制度は本学独自の教育の特色のひとつとして機能してきた。寮の玄関には「自我没却神意実現の自治制」という掲板が掲げられ、創立以来、寮生の生活信条となっている。すなわ

ち、寮生活とは共同生活を通じて自己の品性を向上させる場であり、他からの規則や命令によって律せられたり、自己中心の考えによって生活するのではなく、他人を思いやる温かい心を中心とした高いモラルの意識によって自己を律してゆく自治制が根本であるというコンセプトである。

昭和34年に4年制大学として開学したときにも、初代学長の廣池千英はこの伝統を受け継ぎ「本当の意味での民主主義を体得するためには、自由と自治との訓練を十分に深めなければなりません。諸君は、将来社会に立ちまして、立派な社会人として自由と自治とを十分に発揮する活動ができるための訓練を受けなければならないのであります。麗澤大学は、この自由と自治とを訓練するための場なのであります」と寮生活の意義を語っている。

その後、時代の変化と大学の規模の拡大に伴い、全寮制度から希望入寮制度に移行したが、全寮制度時代からの伝統と「学び」の精神は連綿と受け継がれている。もちろん学生寮には、地方出身の学生や

外国人留学生の経済的な支援という側面もあるが、それ以上に人間形成の場として、また国際的な交流の場として、その学習効果が期待される場でもある。グローバル・ドミトリーのコンセプト

現在の本学のカリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの基礎をなす教育理念は、専門的な真のグローバル・リテラシー、すなわち国際的対話能力や知識活用能力と高い公共性・倫理性を併せ持ち、実社会から強く求められる有為な人材の養成である。東京ドーム10個分というキャンパスの自然に恵まれた環境の中で、教師と学生が共に学び合う学問的姿勢である師弟同学の教育を大切にし、世界の人々から信頼される品格を身につけた人材を育てたいというのが本学の願いであるので、グローバル・ドミトリーも当然のこと、その一翼を担えるものと信じて疑わない。

創立時の学生寮と現在の本学のそれとの大きな違いは、寮生の約半数が留学生であり、人間交流の輪

が国境を越えて広がっていることであろう。現在の入寮生数は合計で284名であるが、そのうち外国人留学生は134名、日本人学生は150名という構成になっている(平成25年5月1日)。この現状を踏まえ、新しい学生寮を「国際的な『学び』の寮」、つまり学生各自がそれぞれに国際的な感覚を養い、人間性を高める学びの場として意義づけたいと思う。つまり、グローバル・ドミトリリー(Global Dormitory)は、まさにその名が示すように、歴史と伝統を誇る麗澤教育の中心的機能を尊重しつつ、グローバル化を迎えた21世紀の大学教育にふさわしい「国際的な『学び』の共同体」(Global Learning Community)の形成をコンセプトにしているわけである。

そのような学びには、他者との人間関係の構築が重要な役割を果たすことは言うまでもない。その意味でグローバル・ドミトリリーには、アパート生活では得難い「5つの出会い」があるとと言えるだろう。すなわち、①先輩・後輩との出会い、②共同体との

出会い、③異文化との出会い、④自己との出会い、⑤先人・卒業生・寮の伝統との出会いである。学生たちは、この貴重な出会いを軸としつつ、自然と共生する緑豊かな環境とモダンな設備の中で、豊かな人間力とグローバル時代への適応力を身に付けていくのである。

かつての全寮制時代は4人あるいは3人を一部屋の単位とし、部屋のリーダーである「部屋長」と寮のリーダーである「寮長」のもと、各学年の寮生が共同生活をすることによって人間的な成長を目指すものであった。他者の役に立つことを自ら実践することによって人間は成長するとの教育観に立つ本学では、部屋長や寮長の役割はキャンパス経験のある上級生が担うことになっている。彼らは、その役割を通して下級生の世話をすることで、自らの人間力を伸ばすことになるのである。本学が同学年の学生のみを構成員とする寮システムを採用しないのも、このような教育理念に基づいている。

その後、時代のニーズによって、相部屋ではなく

個室を中心とした寮生活に変更したが、下級生から上級生までの幅広い人間関係を大切にしつつ、寮長を中心とした寮の運営システムは維持してきた。ただし、全寮制時代と比べると、共同生活の意義や「ルームメイト」というコミュニティの意識が希薄となつているという問題点も指摘されるようになったため、新しいグローバル・ドミトリリーでは、現在の寮体制を改善するシステムとしてユニット制を導入することになった。

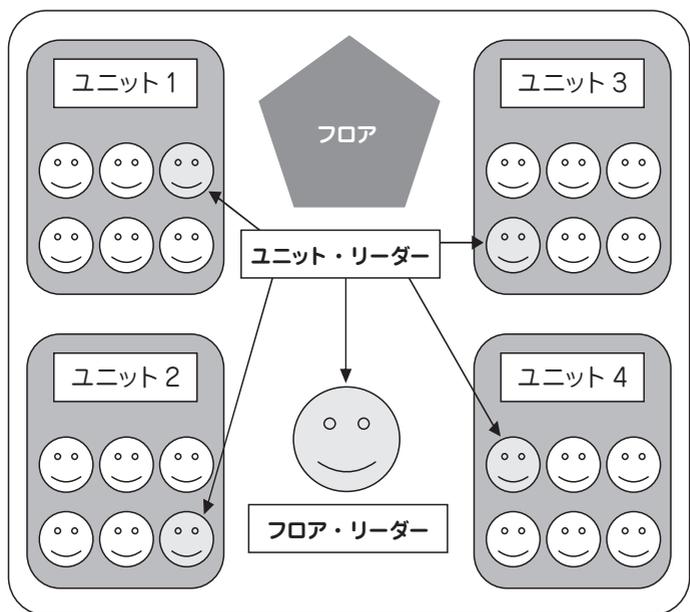
グローバル・ドミトリリーのコミュニティ・システム

ユニット制を導入したのは、従来の「部屋」単位の寮生活の優れた点と、個室の利便性やプライバシーの尊重という利点を調和させるためである。ユニットは学生6人の構成で、これにより、かつての「ルームメイト」に代わり、「ユニット・メイト」という新しい家族的なコミュニティが形成されている。内訳を説明すると、1ユニットの構成は、ユニット・リーダー1人、日本人と留学生のユニッ

ト・メイト5人であり、ユニットの約半分は外国人留学生であるだけでなく、ユニット・リーダーも外国人留学生が務めることもある。このユニット・リーダーとは文字通りユニットの中核的メンバーで、これが従来の寮長の役割を担うことになる。ユニットを構成するメンバーが少数になったことで、ファミリーのような、ひとつのまとまりのあるグローバル・コミュニティを形成するのが狙いである。このコンセプトを実現するため、ユニットは、6つの個室(パーソナル・スペース)、キッチンとリビングを併設した共用空間であるグリーン・ビュー・ラウンジ(Green View Lounge)、シャワー室などで構成されている。

そして4つのユニットが1フロアを構成し、寮全体で女子寮が3階建(3フロア)の2棟、男子寮が4階建(4フロア)の1棟となっている。前述の4ユニットで構成される各フロアは、ユニットに比べて規模は大きくなるけれども、ユニットと同じくグローバル・ドミトリリーを構成する大切なコミュニテ

イであることに変わりはない。そこでフロアを構成するユニット間の連絡調整を行うため、各フロアにもフロア・リーダーというまとめ役を置いているわ



けである。

このようなユニット・システムは、前述したように、以前の寮システムの問題を改善する役割も果たしている。以前は寮ごとのリーダーとして「寮長」を置いていたと述べたが、この寮長システムでは、1人の寮長で数十人の寮生を把握することが困難であるという難点があった。しかし、ユニット制を採用し把握する人数を減らすことで、より血の通ったコミュニケーション・マネジメントが可能になったわけである。ただし、その反面、ユニット・リーダーの数が多すぎることによるマネジメントの複雑化が問題となる場合も考えられる。そこで、4つのユニットが集まったフロアをベースとした寮運営も大切と考え、フロア・リーダー制を導入したわけである。このようにユニットとフロアの2つのコミュニケーションを弾力的に運用することによって、学生たちによる寮運営の共通の目標である「家族的な雰囲気」を保ちながら、快適で効率的なグローバル・ドミトリ全体を運営を目指しているのである。

寮のラーニング・プログラム

ラーニング・プログラムは大きく分けて2つある。ひとつはコミュニケーションの交流や親睦をはかり、「学び」の体験を享受するために学生主体で行う様々なイベントである。たとえば、①寮生が計画する寮での学長講話、教職員の個性・特技を活かしたセミナーや交流会、②独自のユニット・ミーティング、フロア・ミーティングによる交流・親睦、そして③これまでの寮イベントや行事を発展、充実させたもので、クリーン・キャンペーン、お花見、パーベキュー大会、スポーツ大会、ハロウィン・パーティー、クリスマス・パーティー、成田歩きなどがある。

もうひとつは、大学が教職員をあげて支援する寮のラーニング・プログラムで、①フロア・リーダー会議やユニット・リーダー会議などのミーティング、②本学の谷川セミナーハウス（群馬県みなかみ町、露天風呂つき宿泊施設）で学長と学長補佐も参

加する合宿形式の「リーダー・セミナー」、③男子棟、女子棟に各1人の生活面・学習面できめの細かいアドバイスをするチューター制度である。

学生寮の運営や安全管理をさらに盤石なものにするため、専任の管理人を常駐させ、寮生の生活の安全を守る、学生寮全体の玄関となるA棟1階に寮事務室を設ける、学生証による入館認証や監視カメラを設置する、などの管理システムを充実させている。

緑豊かな環境——森との共生

創立者廣池千九郎は、「仁草木に及ぶ」（慈しみの心は、人間はもとより植物にも及ぶという倫理的自然観）をキャンパス・デザインのコンセプトとして、キャンパス内にある樹木を大切に講堂、寄宿舎などを建設したが、このエコロジカルな理念は、今日でも受け継がれている。事実、平成22年12月に竣工した校舎「あすなる」の建設では「森との共生」がキーコンセプトであった。本学は平成22年に国際的な社会的責任規格であるISO26000の活用を宣言

したが、その取り組みの一環として設定した「麗澤課題」のひとつにも「環境の美化・保全に努めること」が謳われている。グローバル・ドミトリオも、この理念に基づき、緑豊かなスペースが創設されており、ユニット・メイトの憩いと交流の場であるリビングのグリーン・ビュー・ラウンジは、周囲の緑が満喫できるように設計されている。

ランドスケープ・デザイン——「三方よし」のコンセプト

従来の学生寮では、狭い道路の両側に金属製フェンスが立ち並び、裏通りのような雰囲気漂い、歩行者にとっては快適とは言えない威圧感のようなものがあった。また寮生にとっても、道路によってキャンパスが2分され、学生寮が孤立しているような印象を覚える学生もいたようだ。以上のような点を改善するためにコモン・スペースを設け、大学ゾーンとの一体感を保つと同時に、道路を通る地域の方々にも安心感と快適感を与えるように、道路を含めたランドスケープ・デザインを工夫した。

具体的には、道路と寮を分断していたフェンスを、植え込みを中心とする緑地に変え、また道路側にベンチを配置するなどして、快適なセミ・パブリックゾーン（中間領域）を設けたわけである。これは①大学、②寮生（プライマリー・ユーザー）、③通路路として利用する小学生、麗澤中・高校へ通う中・高生、地域住民の方々（セカンダリー・ユーザー）にとってグローバル・ドミトリオの価値の最大化を図るように考えられたもので、創業者廣池千九郎の「三方よし」の考え方をランドスケープ・デザインに応用したものとと言えるだろう。「三方よし」とは、自己、相手方、第三者のそれぞれの利益を図るように配慮することがモラルであるという考え方である。

私自身も寮生活の経験者でありその恩恵を受けたひとりであるが、いくら誌面があっても寮の魅力は語り尽くせない。最後に寮生諸君の充実したドミトリオ・ライフを願って筆を置くことにする。

〈特集①〉寮教育

麗澤大学の学生寮——全人教育の理想

麗澤大学学長補佐 井出 元



創業者廣池千九郎の描いた寮教育

創業者廣池千九郎は、昭和3年（1928）に「モラロジー大学」の設立を構想し、その中で寄宿舎制度の導入を説き、「そもそも本大学における当該寄宿舎制度は大学の日課以上の重要事にして、最高道徳の生命の宿るところの係り、学生品性陶冶の根本原理の淵源する所なり」と述べています（「モラロジー大学設立の趣意書」昭和3年5月）。学生一人一人の品性の陶冶、つまり、「道德科学」（モラロジー）に基づく人間教育こそが、私塾を開設することの最大の意味であったのです。

そこで、開塾間もない昭和11年、道德科学専攻塾における「知徳一体」の教育の特色を述べるにあたって、まず知育偏重の弊を、次のように塾生に語りました。

従来教育というと、一般に「いろは」を教えることであるというように狭い意味にしか考えていない。広い意味での教育は人間に真の処世術を教えるものである。つまり、人間がこの世に処して、真に安心、平和および幸福の生活を増進し得ることを教えることに教育の本来の意義がある。これに対して文字を教えることは教育の一部分であ

る。しかし、今日では一般の人々は勿論、識者と
言われる人々でも、教育の一部分と教育の全体と
を混同しているのであるが、これは実に大なる誤
りである。(昭和11年)

「いろはを教える」とは知育を意味しています。そ
れに対して「真の処世法」を教授することを教育の
本来の意義とし、そのためには、教育の場を教室の
中にとどめることなく、学生生徒の生活の全体を教
育の場としなければならなかったのです。この創立
者の遺志を祖述するところに本学が人間教育の場と
して寮生活を重視する所以があります。

では、なぜ創立者廣池は寮生活に教育的な期待を
寄せたのでしょうか。そこには、廣池自身の寮生活
の体験がありました。

大分に在住中、小川含章おがわかんしょうの主宰する私塾麗澤館に
入塾した廣池は(16歳)、寄宿舎での生活を経験
し、寮生活そのものに大きな教育的効果があると実
感したのです。それは、同じ寮の一室に起居する小

川先生の日常生活を目の当たりにすることができた
ことです。このことを後に編纂する『新編小学修身
用書』(明治21年刊)に「人は老いても勉むべし」
と題して、次のように紹介しています。

小川含章は歳七十余なれども、日々講堂にありて
数回の講義をなし、また多数の生徒より質疑せら
るるに応じ、而して少しく問あればなお自ら書を
読みて倦まず。毎夜生徒寄宿舎の一室に移り、寒
暑を論ぜず、十二時に至るまでは必ず書に向か
う。その勤勉、青年の子弟に優れり。(『新編小学
修身用書』第一卷十五)

千九郎が深夜床に就こうとした時、博学で知ら
れ、祖父ほど年上の小川先生が自分の何倍も勉学に
励んでいるという事実は衝撃であったのでしよう。
自己の道に精進することの尊さは、寮で起居し、小
川先生の私生活を目の当たりにしたからこそ実感さ
れたものであり、小川先生に倣い、自らも精進した

のです。後に千九郎自身「余の奮闘時代は、朝は五
時より、夜は一時までも疲労も病気も押し押し
押し通し、一時間も休むことなし」と述懐していま
すが、この勉学への不断の精進は、少年時代の小川
先生の後ろ姿から無言の内に示唆されたものです
(『廣池千九郎日記』①117頁)。

要するに麗澤館は漢学を主とする私塾ですので、
正課の授業は中国の古典を学び、寮での生活をと
して正課で得た知識を活かす人間力を培うことが課
題となっていました。麗澤館での寮生活の体験は千
九郎の生活信条となり、学者として大成していく原
点であり、その人格を陶冶していく原動力であつた
といえるでしょう。

この体験を踏まえて、明治21年(22歳)、中津高
等小学校に赴任した時、廣池は寄宿舎制を導入する
ことを提案し、30人の寄宿生を受け入れました。寮
費、特に食費や生徒の病気の時の対応など周到な配
慮が高く評価され、その甲斐あって「生徒は常に各
級の首位を占む。よって寄宿生の風聞次第に令く、

終に市中よりも生徒を予に托する父兄あり」という
成果を記しています(同上『日記』67頁)。さらに明
治35年ころ、「早稲田大学寮構想」という提案書を
しました。このように廣池の教育は寄宿制度を前提と
して初めて完成するものであったのです。この情熱
は晩年に開設した道徳科学専攻塾において結実しま
した。

道徳科学専攻塾における寮生活の課題

寮での生活は起床から就寝まで、常に寮生として
の自覚が求められます。そこには先輩後輩という縦
のつながりや同級生同士の横のつながりがありま
す。この人間関係の中で育まれる人間力こそが寮生
活の成果であり、「二十四時間教育」とし、「全人教
育」と称した所以です。そして廣池は道徳科学専攻
塾の寄宿舎の玄関正面に「自我没却神意実現之自治
制」と揮毫した言葉を掲げ、寮生活の課題を示しま
した。

「自我」とは「神意」（神の心）の対極にあるものです。自我は個人の成長の核をなすものであると同時に、それが利己的に働く時、人間関係や、時代の流れとの不和をもたらし、自己の人間としての成長をさまたげることにもなりかねないのです。特に共同生活をする場合、各自が勝手な行動をとっていたのでは生活がなりたちません。そのためには、「自我」を没却しなければならぬとされているのです。よって私たちは寮での共同生活をおして自己中心的な意思を制御し超克しなければ円滑な生活を営むことができないという体験をします。その上で大切なことは「神意」を自己実現するという目標を開示していることです。

では「神意」とは何か。「神意」（慈悲の心）というとなにかしら縁遠い印象がありますが、廣池は「寮生活の心得」を著し、「神意」を日常生活の中で実現するための道（マナーや心がけ）を提示しました。さらに自我に固執する自らの心を気付かせ、その心を超克することによって「神意」を育む決意

を記した「朝夕の宣誓文」を著しました。開学当時、朝夕、500名余の寮生全員が大講堂に集合し「宣誓文」を読み上げていました。寮生は朝夕「神意」を実現することを宣誓し、それを脳裏に納め、寮生活にとりくんだのです。このような意味で寮は各自の人格の陶冶の源となるとしているのです。つまり、日常生活の場をおして「神意」を自己実現するための力（意思）を身につけることが寮生活の課題でした。

学生一人一人が自我と対峙し、自我に固執する自らを省み、その囚われをなくしていこうと努力するきっかけを与え、日々の生活の中で「神意」を実現することを試みるための生活の場こそ「寄宿舎生活」であるのです。言い換えるならば、寮は、廣池の所謂「自修研鑽の実力」（生涯学習力）を養成し、自らの力で人間力を高める場なのです。

一般に「自治」とは自治組織とか、地方自治というように自分（自分たち）が治めるといふ、言わば「自我」を基にした自治の意味です。しかし、廣池

の所謂「自治」とは、寮生各自の「自我没却神意実現」を志す意思に基づいた自治であるとしています。つまり、寮が「自治制」であるということは、寮生活をおして自らの成長のために努力し訓練することを基本とする意味です。

このように廣池の脳裏に描かれた寮生活は崇高な理念のもとに展開されていますが、それは決して厳格な修業・訓練に終始するものではなく、寮生一人一人の全人的な成長を温かく見守ることを基本とするものでした。この寄宿舎制度を実現するために、教職員、医師をはじめ、廣池自身も構内に住居し「真に、肉親の父母以上の心をもって学生を愛し、各自の徳育に対して全責任を負う」としています。太陽のごとくすべての学生を温かく育てるといふ「麗澤」の意味するところです。ここに「二十四時間教育」をモットーとし、教職員と学生がともに成長して欲しいという「師弟同学」の理想が描かれています。

そこで寮生活をさらに充実させるために、寮の行

事として、「慈善遠足」・「郊外遠足」（鑑賞的遠足、神社・寺院・教会・学校の訪問）・「園芸趣味的遠足」などの寮の行事を行いたいとしています。さらに心身を癒す「教育的公園」を設け、青少年の嗜好に応じた健全な「娯楽的図書館」や「教育的娯楽室」を設立し、寮の行事として「慈善」活動や神社仏閣の見学、名士訪問などの校外での教育、さらに夜間座談会や茶話会を開催することなどを提案しています。これらの計画の具体的な内容はさだかではありませんが、この創立者の構想から「あらゆる機会を人格教育の集中する」ことによる「全人教育」をめざす本学の理想を知ることができます。また自然環境を重視しています。春には桜を、秋には紅葉を愛で、広大な芝生と多くの木々に囲まれた教育環境のすべてが、寮生にとっては、我が家の庭園であるのです。このような豊かな環境こそが、全寮制を前提とした廣池の人間教育の場であったのです。

このような創立者が寮教育にかけた遺志は、今日、麗澤大学においても健全に受け継がれています。

「学士力」や「社会人基礎力」など大学教育の求められる課題は、学生一人一人の人間形成にかかわる根本的な問題であり、正課の授業を通じて習得すると同時に、学生生活の全般をとおして育成されていくものです。そこで今日各大学において、従来、地方出身の学生や、外国人留学生の経済的な支援として設けられていた学生寮を、人間教育の場として、また国際的な交流の場と位置づけ、その教育的な効果を期待する傾向が顕著です。

本学においては、先に述べた創立者の理想を祖述し、この現代の傾向に沿うことも視野に入れ、寮生の半数が外国人留学生であるという現状をふまえて、平成25年に新しくグローバル・ドミトリーを設立しました。

往年の（全寮制時代の）寮体制は、4人1部屋を単位とし、「部屋長」の基に各学年の寮生が、協同して生活することを基本としていました。そこには

ルームメイトというつながりはありましたが、必ずしも学生一人一人の自由な時間や空間が確保されていたとは言えません。しかし、後に通学制を導入することを機に個室を中心とした寮体制となり個人の自由は確保されたものの、寮での協同生活という意識が薄らぎ、ルームメイトという意識が失われつつありました。そこで、新寮は、創立当初の「部屋」を単位とした寮生活の利点と、従来の「個室」中心の寮生活の利点とを兼ね合わせたいと考え、6人の寮生から成るユニットを中心とした協同生活へと移行しました。

各ユニットには6つの個室と、リビングルーム、台所、トイレ。シャワールームなどを完備し、いわば6LKを単位とした協同の生活を創出しました。ユニットにはユニット・リーダーを置き、4つのユニットが一つのフロアを形成し、さらにフロア・リーダーを置くという組織としました。

このような学生寮の体制を実施した背景には、近時の学生の意識の中にアットホームな環境を求める

傾向があります。たとえば、ある寮長（2012年度）は次のように寮生活の抱負を述べています。

私が二年間寮生活をしてきて、「あー、寮においてよかったな」と思う瞬間は、帰ってきた時にみんなが「おかえり」と言ってくれる時です。これが一人暮らしと寮生生活との一番の違いであると思います。夜遅く疲れてアルバイトから帰って来た時などは、特に迎えてくれる友達がいるということとは、本当にうれしい気分になります。また寮で病気になった時、必ず看病してくれますし、私も友達が風邪を引いたならば助けます。家族とまではいきませんが、それに、人に対する思いやりの心が寮生活をするると自然に育まれていくと思います。

アットホームな環境の中でルームメイトの意識を育みたいということが現寮生に共通した意識であるのです。そして、寮生活を営むことによって「互

助」の関係を体験し、そのことによって「互恵」の心を培い、そこから「互敬」という道徳的な意思が育まれていくと考えています。寮生活はこのような意味で人間教育の場であるといえるのです。寮で生活を通してコミュニケーション能力やチームワーク・リーダーシップなどの人間力（学士力）が自然に培われていきます。さらにユニットを越えた友人とのかわりを展開するために各フロアには共同の多目的ルームを設けてあります。

特に寮生の約半分が外国人留生ですので、ユニットでの生活はおのずから国際的な経験を積む場となります。ここで寮生は異なる価値観や習慣と出会い、国際感覚を日常の生活をおとして自然に培うこととなります。ユニットでの生活は、日本語に不安な外国人留生にとってことばの面でのサポート体制となり、日本人寮生にとっては留学先でのホームステイ感覚の生活を営むことができます。この国際的な感覚を養うことは国際寮としての本学の寮生活の大きな目的です。そして、注目したいのは次

の寮生の意見です。

私たち日本人の寮生は、外国人の寮生と出会って、その人の国のイメージを描きます。それと同じように外国人の寮生は、私たち日本人の寮生を見て日本という国のイメージをもつのです。このような意味で私たちは日本の代表であるという意識をもち、日本人として恥ずかしくない行動と日本についての知識をもつことが大切です。

日本人学生が国際的な場に身をおくことによつて「日本人としての自覚」が高まったということとは、寮生活をとおして得る大切な気づきを示唆してまします。寮での生活の特色は、その協同生活にあり、その体験をとおして、先輩・後輩との出会い、共同体との出会い、異文化との出会い、自己との出会い、寮の伝統との出会いなど多くの出会いがあります。こ

れらの「出会い」とおして、各自がそれぞれに切磋琢磨し、葛藤しつつ人間力を高めて欲しいと考えています。このように寮生活は、寮での生活自体がすべて教育の場であるのですが、創立者の考えに基づいて、寮行事として学生の自主企画による教育の場として教職員の講話や交流の場、さらに寮でのイベントなども積極的な展開を期待します。また大学主催の行事としては月例のユニット・リーダー会議、フロア・リーダー会議、さらにユニット・リーダーセミナーなど開催し、教職員が一丸となって寮教育を展開しています。

このように本学の学生寮は、創立者の理想を念頭に置き、人間教育を掲げる建学の精神を実現する場として存在しています。今回は寮生活の経験者の手記を特集しました。それらを読むことによつて本学の人間教育の実際をご理解いただければ幸いです。

〈特集①〉寮教育

ユニット・リーダーとしての1年間

——「自分の考えを生かす」ことを学ぶ

早見 大

(経営学科3年)



学生寮での生活

私が北海道から出てきて学生寮に入寮したのは、2011年の3月でした。私にとってはそれまでに、何度か訪れたことがある麗澤大学も、入寮日は初めて訪れる場所のように「期待」と「不安」でいっぱいでした。実際の寮生活も最初の頃は、わからないことばかりで先輩に何度も、「寮での生活の仕方」や「今後の大学生活」などについて教えてもらい、不安を解消させていました。

寮生活においてできた友人は私にとって「一生大切にできる家族」であると思っています。大学生と

いう比較的自由な時代に、毎日と一緒に過ごす、先輩、同級生、後輩は私にとってまさにかけがえのない「家族」です。時には喧嘩をし、時には同じ悩みについて話し合い、時には全力で遊ぶ。このような経験が出来たのも私は学生寮に入寮したからだと思っています。

そして今、私の充実した寮生活と大学での勉強を支えてくれたきた両親に心から感謝しています。

私にとってのユニット・リーダー

私が、学生寮の役職を務めはじめたのは1年生の後期からでした。そこから、現在に至るまで、大学

2年次には「寮長」、大学3年次には「ユニット・リーダー」「フロア・リーダー」「男子議長」と様々な役職を務めてきました。

私にとってユニット・リーダーとは、ユニット内の「お父さん」的な存在であると考えています。「寮生は家族。なんかの縁で同じ屋根の下に住むことになった偶然の関係かもしれないけど、ある意味不思議な縁なんだから、その縁を大切にしないとな」。先輩の寮長はいつも私にこのように話していました。この先輩の影響かも知れませんが、私のリーダーを務める上でのテーマは「寮生は家族」です。ユニット・リーダーは「父親」のような存在として、ユニット内の家族と一緒に笑って、泣いて、時には心を鬼にして怒らなくてはならない存在であるべきだと考え、日々を過ごしてきました。

ユニット・リーダーとしての経験

ユニット・リーダーとして、私はこの1年間多くのことを経験できたと思っています。最初に頭に思

い浮かぶことは、「組織を運営することの難しさ」です。今年は、ユニット・リーダー会の議長として「各ユニットをまとめているリーダーをさらにまとめる」という大役を任せていただきました。

当初は、先輩方からの「お前しかいないだろ」という温かい言葉も頂き、議長を務める決意をしましたが、実際に議長としての仕事を始めると、様々な問題が発生し、悩む日々が続きました。そのような時に、私を支えてくれたのは、同じ議長である「女子議長」や、先輩の方々でした。私が議長職で悩んでいるときに、ある先輩はメールで「議長になって先輩ばかりだし、大変だろうけど、気張りすぎて周りが見えなくなるなよ。何とかなるから背負い込み過ぎるなよ。期待してるぜ」と、励ましてくれたり、また別の先輩は、「お前が思ったことをやれ。周りから文句言われたら、俺（この言葉をかけてくれた先輩）が良いって言ったって言え」と言ってくれました。

私は今年1年、「自分自身がリーダーとして何を

すればよいのか。そして何ができるのか」ということを考えてきました。その答えはまだ見つかっていません。しかし、今の私に言えることは、こんな私にも「支えてくれる人がいる」からこそ「自分の考え」が生かせるということです。

今後の想い

私自身の寮での生活は、あと1年ちょっとです。最近、同級生と、「僕たちが入寮した時の寮長の先輩たちといま同じ学年だぜ」という話をよくします。私が入寮した時の先輩たちは、私にとって憧れる存在の人たちばかりでした。そして今、その先輩たちと同じ立場に立っている私は、後輩たちにとっ

て「信頼できる存在」となっているでしょうか。

今後の私の寮での役割は、後輩に私の経験、考えていたことなどを引き継いで行くことだと思っています。この「後輩育成」は、私のユニット・リーダーとしての責任であり、同時に最終到達目標でもあります。私が卒業するときには、後輩が自信をもって自分なりのユニット・リーダーを務められるようになってほしいと願っています。そして、残りの学生寮での生活が、私の今後の人生において「一生の宝物」と言えるようなものになるように、大学生活としての最後の1年を一生懸命に過ごしていきたいと考えています。

ユニット・リーダーとしての2つの「自治」

佐川千里

(英語・英米文化専攻3年)



私は寮生活を始めてもう少しで3年になります。

しかし、今でも入寮した当時のことを鮮明に覚えています。私が入寮した当時は東日本大震災が起きた年であり、私の出身である茨城県も多大なる被害を受けていました。毎日ラジオから聞こえる悲惨な状況を耳にし、崩れた道路を見るたびに、私の新たな場所での暮らしへの不安は募っていました。3月29日、寮生活が初めての私は不安と期待を胸に寮にやってきました。受付場所での寮長たちの明るい笑顔、挨拶は私の緊張と不安を一気にほぐし温かく迎えてくれました。私の大学生活はここから始まるのだと感じたと同時に寮長の偉大さを感じたこと

を覚えています。

あれから2年の月日がたち、2013年から寮は自然豊かな素晴らしい外観とともに新たな「グロバル・ドミトリ」になりました。以前の少人数での寮長制度(1階ごとに1人の寮長。つまりは約30人の寮生を1人で担当していた)は改善され、今年から約40人のユニット・リーダーという新しい寮体制となりました。このユニット・リーダーは1ユニット6人を1人で担当するため、以前に比べると寮長の負担は減るのではという案をもとに取り入れられました。2年生の時にユニット・リーダー(寮長とは異なり掃除、イベント出席確認等の役割)を務め

ていた私は、今年度ユニット・リーダーになることを決めました。それまで正直リーダーとは何をすべきなのか、どうあるべきなのか。自分ではあまり理解しておらず、ただ毎週行うユニットの掃除を皆でこなすこと、パーティーをして交流をすることしか

考えておりませんでした。そのため私は谷川でのリーダーセミナーを経て、新たにユニット・リーダーとしての心構えを身につけました。

麗澤大学学生寮には長い歴史があり、寮の歴史を学ぶことは先代から学ぶことだと教えられ、先生方、先輩方からリーダーとしての自覚を学びました。こういったセミナーは私にとって初めてだったので、自分にとって足りなかったものを吸収する良い機会になりました。その中で私は2つの「自治」という考え方がリーダーにとって一番必要なことだと感じました。

1つ目の「自治」は自分たちが寮を治めるということ。これは寮生たちの上に立ち一人ひとりときちんと言き合っていく、そして寮全体を治めるという

意味になります。

2つ目の「自治」は自分を治めるということ。自分を治め成長させることによって周りの寮生も一緒に成長していくということを意味しています。リーダーとして私に足りないのはこの「自治」だったのです。また、リーダーは責任感も同様に必要だと思います。しかし、私はその責任感という言葉から「リーダーとしての役割を責任という重荷としてとらえるのではなく誇りに思っしてほしい」という素晴らしい意見ももらい、私は自分にできることを一生懸命やり誇りをもってリーダーという立場になろうと決心しました。谷川でのセミナーを通じて先輩たちの想いや意思を受け継ぎ「グロバル・ドミトリ」に生かしていこうと思えました。

ユニット・リーダーとして1年間「自治」という言葉を胸にリーダーという役割を果たしてきました。自分の立場を考え、寮生がルールを破ったら注意し、なぜそれがダメなのかを説明してあげまし

た。私のユニットの後輩、同級生、留学生たちは徐々にユニット会議の時に一人ひとりが意見をきちんと伝えてくれるようになり、6人がただ仲良く生活するだけでなくお互いにメリハリをつけて注意し合っていました。この時リーダーを務めていて本当に良かったなと思います、ユニット・リーダーとしてのやりがいを感じました。

また、ユニット・リーダーになり1、2年生のときには全く気付くことができなかつたイベントの主催者側の立場に自分がたち、誰かに楽しさを与えるられる喜び、参加者のニーズに合った企画を考えることの難しさを痛感しました。もちろん初めから完璧にこなせていた事なんてひとつもなく、自分で試行錯誤してリーダーとしての本質をこの1年で理解できたのではないかと感じています。

3年生になりユニット・リーダーとしての役割を与えてもらえたことは私にとって大きな成長の場となりました。周囲に目を向けられるようになり、相手にどうやったら気持ち伝わるのか考え、自分の日々の姿が後輩たちへのお手本となることを意識し、自分の行動に自覚を持ち、1年次、2年次とは違った寮生活を送ることができました。悩んでいたときにサポートしてくれた先輩や励ましてくれた同級生、そして自分を育ててくれた後輩たちがいる寮生活だったからこそ、私は自分をリーダーとして成長できたのだと思います。支えてくれた先生方、先輩方、同級生、後輩たち、本当にありがとうございます。そしてこのユニット・リーダーという役割に誇りを持ち、今後の自分の人生に生かしていきたいと思えます。

〈特集①〉寮教育

私にとっての寮内留学

麗澤大学は現在13カ国、33大学と提携しており、世界中からたくさん留学生が集まっています。そしてその多くが学生寮で日本人学生と共に生活しています。私自身オーストラリアへ1年半留学した経験があり、特に英語を必要とする留学生および日本人学生への英語のサポート等を行ってきました。そしてこのような経験を通じていろいろな発見、気づきがありました。例として、留学生たちが毎晩のように寮の集會室で騒いでいた時期があり、ユニット・リーダーと自分と留学生たちとで集會室の使い方について真剣に話し合ったことがあります。自分はその際お互いの言い分を通訊して事態をなんと

か収めようと尽力しました。しかし、当初彼らは納得してくれず、本当に苦労したのを覚えています。海外経験もあり、ある程度は違う文化、習慣への理解はあるつもりでしたが、ここまで違うかと正直驚きました。しかし、根気強く話し合いを続け最終的には納得してくれ、彼らとの関係もむしろそれ以降の方が深まりました。当たり前のことですが、誠意を持って接することが何より大切だなと実感しました。

皆様ご飯を食べたこと、一緒にサッカーの試合を見に行ったこと、東京観光をしたことなど彼らとの思い出はたくさんあります。ですが、留学生がそれ

武藤 幸祐
(経営学科3年)



ぞれの国へ帰ってしまう時が一番辛いときでもありません。ですが、この寮で築いた友情は一生続くものだと思信しています。これは寮生各々が思っていることでもあると思います。

また英語をネイティブと話す機会がない、英語をもっと使いたいと思っている人に麗澤大学学生寮は非常にいい場所であると思います。英語を話す、そして聞く頻度は寮に住んでいるか、いないかでは明らかに違います。実際、自分も留学生のために日本語を話すよう心がけてはいますが、英語を使う場面が生活のなかでたくさんあり、留学から帰ってきて

英語力が落ちず正直助かっています。これは英語に限ったことではなく、中国語、韓国語、タイ語、ドイツ語などその他多くの言語のネイティブスピーカーが寮にはいます。立派なことに、ほとんどの留学生が母国語を使おうとせず日本語を常に使い、分かんなくともなんとか伝えようとしています。

また、日本人学生も積極的に留学生とコミュニケーションを図り、共に勉強を教え合うといった場面も見受けられます。非常に良いことだと思います。このように学生寮には熱心な学生が数多くおり、日々お互いに助け合い、高め合って生活しています。

〈特集①〉寮教育

国際交流の「第2の家」

千葉祥子
(英語コミュニケーション専攻4年)



私が初めて寮に入ったとき、同じ寮に留学生がいるということが新鮮でした。今まで家族とずっと暮らしてきた私にとって、日本全国および世界中から学生が集まって暮らすということがとても楽しみでした。それと同時に共同生活をする中で、他人に気を使うことはとても大切なことであるとも理解していました。

当時の私は、特に留学生は「違う文化や価値観を持つている」からと、勝手に意識していました。そのためか、当時の私は逆に気を使いすぎていて、他の寮生と留学生との接し方が異なっていた気がしますが、生活していくうえで特に不安はありませんでし

たが、どことなく他の寮生たちとの距離を感じ、部屋にいることが多かったように思います。

そんな時に仲良くなったのが、台湾からの留学生でした。最初はキッチンでのちょっとした会話から始まり、一緒に食事しようと誘ってくれ、勉強したり、時にはお誕生日会をしたりと、寮にいる時間を彼女たちと過ごすようになりました。また、学内でも気軽に私に声をかけてくれたり、「日本語のレポートを見てほしい」と頼まれたりすることがとても嬉しかったです。

初めて家族から離れて暮らし始めた私にとって、こうして姉妹のように接してくれる友達がいること



スペイン留学時の友人と

は大きな支えとなりました。そして、彼女たちが日本語を一生懸命学んでいる姿を見て、私も自分の専攻である英語を真剣に勉強するようになりました。また、日本語の母語話者として日本語を教えながらも、日本語という言語を見つめ直すことも多々ありました。1年生が終わるころ、彼女たちは卒業しましたが、今でも連絡を取り合っている大切な友達です。

私のもうひとつの寮生活体験は、短期留学していた時に滞在していた大学の寮でした。2年生の春休

み、私はスペイン語を勉強するために1カ月スペインの大学で授業を受けました。

寮に到着した初日、建物の外見や個室の造りがまるでホテルのようで驚きましたが、生活していく中で麗澤大学の寮生としての視点から様々な違いを発見することができました。門限がなく、男女共同の寮で、週に一度部屋の掃除をしてもらえる、とても快適で自由な生活空間です。

しかし、この寮と私たちが住んでいる麗澤大学の寮との決定的な違いは、学生同士の「交流」だと感じました。スペイン人の学生同士やスペイン語が堪能な留学生はよく一緒に食事をしたり、お互いの部屋を行き来して勉強をしていました。私がかもし流暢にスペイン語が話せたら、その輪の中に入っていく友達ももっと増えたかもしれない、とずっと考えていました。私がスペイン語にそれほど自信がなかったということも理由の一つですが、何よりも一歩前に踏み出す勇気がなかったのだと思います。学食で食事をする時も、エレベーターで一緒になった時も

挨拶をするだけで、あまり他の寮生と会話をするのができませんでした。この一歩を踏み出すことができていたら、私の生活はまた少し変わっていたでしょう。

この経験を踏まえ、4年生になってユニット・リーダーとなる決意をしました。話すことが苦手な寮生も、日本語があまり堪能ではなくても、私にできることを見つけて「寮に入ってよかった」と思ってもらいたかったからです。また、今まで日本で生活をしたことがない留学生にとっては、私たちの寮生活が日本の生活として記憶に残るでしょう。日本人の一モデルとして、居心地がいいと思える寮生活を作りたいと思いました。

寮生活の4年間とユニット・リーダーの経験を通

して感じることは、日本人でも留学生でも、寮で一緒に生活をする寮生であることに変わりはないということです。大切なことは、寮生一人ひとりを個人として見ていくことです。違う文化や違う家庭で育ってきた私たちが一緒に住むことは、決して容易なことではありません。それでも、お互いに歩み寄りうと心掛けることにより、私たちの「第2の家」と呼べるような場所を作り出すことができますと思います。

私は今年、卒業後にスペインへもう一度勉強に行きます。その時もまた寮やルームシェアなどの共同生活をしようと計画しているので、今までの寮生活を踏まえて今度は私から一歩を踏み出して、言葉や国を超えた積極的な交流をしていきます。

新しい家族との思い出

(国際交流・国際協力専攻4年)

朴 基良



去年(2012年)、3年に編入した時、今住んでいるグローバル・ドミトリイは工事中でした。寮はありましたが、一人暮らしがしたかったので寮には入りませんでした。初めての一人暮らしはとても楽で自由さを感じました。少し遠かったですが、特に寮には入りたいとは思いませんでした。しかし、暑い時や寒い時、授業が空いている時間に寝たい時、一人で夕食を食べながらFacebookで友達が留学生の友達と一緒にご飯を作ったりして食べている写真を見た時などには少し寂しさを感じ、寮生活もいいな! と思いました。それ以外には門限もなく、掃除も自由な一人暮らしの生活が好きでした。ただ、

卒業する前に一回ぐらいは学生生活の特権であり、楽しみである寮生活をしてみたいなという気持ちはありました。その中で親に来年からは一人暮らしより寮に入ったらどう、と言われ、寮に入ることを少し考えるようになりました。一人暮らしよりは安く快適な新寮、学校にも近くて通学も2時間ぐらい節約できるところがすごく魅力的に感じられました。最初は部屋がすごく狭いと聞いて心配しましたが、友達の部屋に遊びに行って見た部屋はそんなに悪くありませんでした。このぐらいなら十分だと思いい、新寮での生活が楽しみになりました。そうやって、今年(2013年)の3月に入寮し

て寮生活を始め、いつの間にか9カ月が経ちました。前期のユニットメンバーは日本人4人、自分を含む留学生2人でした。留学生は台湾人でしたが、中国語を学んでいたのでもちょうどいいと思えました。一番心配だった共用使用の不便さはあまり感じず、皆ともすぐ仲良くなれました。夜にはいつもリビングに集まっているいろいろなおしゃべりをしたりご



ユニットのメンバーと

飯を作って食べたりしました。大変な時には友達にすぐ相談もできるように、とても心強いと感じました。毎日が楽しくて寮に入って本当によかったと思えました。しかし、後期になって台湾の友達は国へ帰り、日本人2人は留学に行ったり、実家に帰ったりすることです。3人だけが残るようになりました。新しい学生が入ってきたらまた仲良くなれるかなという不安もありましたが、それはすぐ解消されました。今、新しいユニットのメンバーと共にまた新しい思い出を作っています。

寮には様々なルールやイベントがあります。ユニット・リーダー達と友達の行動力と思いやり、犠牲の精神、感謝する気持ちなどを見て見習いたいと思いました。月1回のイベントでは他のユニットの学生たちとも一緒に遊べるいい機会になります。誕生日になると皆でお祝いしてあげたり、もらったりします。また、グローバル・ドミトリイは1ユニットに日本人3人と外国人3人の比率で成り立っていて寮の名前通り小さいグローバル社会になっていま

す。3〜4カ国からの人が集まって母国の話をしたり、料理を作って食べたりしますが、生活自体が異文化交流の場になっているのです。そして、寮に住んでいて本当に良かったと思うところのもうひとつは、一緒に語学勉強もできるということです。寮にはたくさん国籍の留学生がいて、勉強している言語について分からないことがあったらすぐ聞けますし、会話練習もできます。

今（2013年12月）考えてみると、寮に入ったのはいい選択であって、様々なことが学べてよかったと思います。絶対共同生活は無理だと思ったのに、そうでもない。私も共同生活ができる！ 社会生活でまた共同生活をするようになって心配はないと思うようになりました。同じユニットの友達はいずれ皆家族みたいに仲良くなって、別れる時はとても寂しいですが、素敵な仲間と一緒に過ごせたということ

とに感謝しています。卒業して一人暮らしすると、毎晩のようにリビングルームで皆でおしゃべりしたことや留学生の友達と一緒に勉強したのが一番懐かしくなりそうです。

もし、寮生活について迷っている人がいればぜひお勧めしたいです。半年でもいいです。生活してみれば、その中で自然に学べることも多く、全てが自分にとっていい経験になります。悪い癖があったならそれを改善できる場にもなります。自分にとって学校生活の楽しい思い出も大きいですが、寮生活に対する思い出はまた違う感覚の思い出として記憶すると思います。なぜかというところ、ユニットのメンバーは「第2の家族」だからです。一生の宝物なのです。残り3カ月も楽しくて新しい思い出をたくさん作っていききたいと思います。

〈特集①〉寮教育

Dormitory Education

私の寮生活は2010年3月29日に始まった。忘れもしない入寮日。これまでに経験したことのない緊張感が私を包みこむ。麗澤の地に降り立った時、新しい地での生活に対する期待と不安が一気に押し寄せてきた。

だがその不安を消し去るような出来事が起こる。それは寮の先輩との出逢いだった。「分からないことがあれば何でも聞いてね」と笑顔で言う同じ四国出身の先輩は、大きな広い心で包み込んでくれる母のように感じた。

そして無事に引越しが終わり両親と別れ、麗澤大学学生寮での生活がスタートした。初日の夜、寝

る前に感じたのは家族の存在の大きさだ。今までも修学旅行や部活の試合等で家族以外と過ごした日々はあったはずなのに、これからは一緒に生活しないのかと思うと急に不安が襲ってきた。慣れない都会の街並みや標準語、留学生との生活に私は耐えられないのかと何度も自問自答し、なかなか寝付けなかった。

このようなスタートをきった寮生活だったが、人間の適応力は優れたもので、気づけば友達ができ、先輩や留学生とも自然と打ち解けていったのだ。寮の仲間というのは本当に特別で、今では困ったことがあればすぐに相談できる家族のような存在だ。寮

（英語・英米文化専攻4年）

佐近志都香



生活は毎年いろいろな楽しみ方があり、ドラマがあり、学びがあり、成長がある。学年ごとに簡単に振り返ってみたい。

1年目は何にもとらわれずただ楽しみ、先輩に温かく迎え入れてもらったという印象だ。何もかも新鮮で毎日が刺激的だった。寮のイベントは常に先輩方に楽しませて貰った。1年次は自分中心で、大学生生活に慣れるのに必死で周りのことがあまり見えていなかった。イベントの裏側には先輩方の陰の努力があったはずなのに気づいていなかった。

2年目には寮生活に慣れてきて自分で生活を組み立てるのが上手くなった。学生は融通の利く時間がある程度確保されており、時間をどう使うかは全て自分に委ねられている。教職科目を履修していたため、週に空きコマ4つと授業は多かったが自分で一日のスケジュールを組み立てながら生活するのは楽しかった。予定をぎっしり詰め込んでいたので、皆にいつ寝ているのかと驚かれたほどでした。でも寮という大学の敷地内に住んでいたからこそ上手く時

間の管理ができていたのだと思う。親が毎朝起こしてくれる訳ではないため、慌ただしい生活でも先輩にアドバイスを貰い、励まして貰ったことで耐え抜けた。また後輩の存在も私にとっては大きく、よりよく生きよう、と思わせてくれた。

3年目は寮長に任命されたことで寮に対する想いが大きく変化した年だ。大学には様々な部活やサークルがあるがどんな団体よりも繊細で、活動時間の長い団体といっても過言ではない。なぜなら寮生活は24時間、365日続いているからだ。各団体のリーダーと共に1年を振り返るリーダーセミナーPartⅡというセミナーで、ある部長に「寮なんて寝て食べるだけなのに寮会議って必要？」と言われたことがある。言葉で説明しても経験した人にしか分からないのだと思う。私も寮長を経験する前まで複雑な仕事ではないだろうと考えていた。だが、そんな甘いものではなかった。少しでも気を抜くと誰かが見ていたかのように何処かで何かが起こる。30人みんなが安全に気持ちよく生活する、それだけなのに上

手く運営出来ない自分が歯がゆかった。寮長として見られることを負担に感じ、部屋から外に出たくなくなった時期もあった。

4年目になってやっとリーダーとしての自分のスタイルが見つかった。3年次にすっかり寮と向き合ったからだと思う。本当の親のように真剣に寮生と向き合い叱り励ましてくれるK夫妻、私の階で事故が起こり、どうすればいいか分からず悩んでいた時に話を聞いてくれたT部長、自分のことのように考えて一緒に悩んでくれた寮長たちの存在が私を大きく成長させてくれた。自分の気持ちを素直に表現できる仲間を得たことは私にとって一生の財産だ。また寮は自分の弱さと向き合うきっかけを与えてくれた。就職活動を通じて自分のことを見つめ直す機会が多々あったが、寮という生活に密着した場であるからこそ、寮生に嫌われることを懸念して注意できない、という私の弱い面に4年目にしてやっと向き合うことができた。

麗澤の寮は精神的に鍛えられる場所だともいえる。留学生と日本人が一緒に暮らすため、何があっても物怖じしない環境適応力が身に付く。2013年2月にミクロネシア連邦へ行ったのだが途上国であれ顔色一つ変えず生き抜けたのは寮生活の経験があったからだと思う。

最後に、親からの自立も寮で得たものであるといえる。卒業後の道が定まらなくて不安になった時、頼ったのは寮や大学の友達、先輩、職員、教授だった。家族と一緒に暮らしていたら親からの精神的な自立はできなかったように思う。精神的に強くなり親に頼らなくても生きていける力が少しはついた。しかし、麗澤という学び舎で成長できたのは寮生活をさせてくれた両親のお陰であることには変わりない。この4年間、遠い徳島から見守ってくれて本当にありがとう。寮生活を経験できていなければ今の私はいないだろう。私と関わってくれた全ての人に感謝したい。

寮生活の4年間

細川祥平

(日本語・日本文化専攻4年)



私の4年間は、入学式からでなく、入寮日から始まった。慣れない土地での、初めての親元を離れての生活である。しかし、入寮日当日そんな不安もすぐになくなった。在寮生である先輩方のおもてなしの優しさがこれからの生活の不安をなくしてくれた。当時の私は、ここまでもてなしていただいで申し訳ない気持ちもあったが、寮で生活していく中で「仲間がいる喜び」というものを感じるようになって、当時の私に対し、申し訳ないほど歓迎していただいた先輩方の気持ち理解了きた。

寮で生活している中で、毎日誰かしら寮にいた。ただ、それだけのことが「仲間がいる喜び」になっ

ていた。朝起きて歯を磨くときも、学校に登校しようとしているときも、帰って来たときや、お風呂でも、仲間と顔を合わせるような生活だ。「おはよう」「いつてらっしゃい」「おかえり」「おやすみ」「お疲れ様」その家族のような挨拶の繰り返しによって、私の中で、孤独ではないという安心感が広がった。もちろん、一人の時間というものもあるが、寮の中では何事も共有し合っていることが楽しかった。一日が終わる前に、皆で共用スペースに集まりその日の話をしたり、先輩から寮の歴史を教えてくださいたいと、多くのことを共有し合った。

ただ、寮の仲間と遊ぶことだけが楽しかったので

なく、毎週行う掃除や、寮のルールの改善、寮の仲間のルール違反など、お互い助け合えることで自分は寮生の一人なのだという実感が湧いてくるのだ。皆が生活しやすいようなルールを作ったり、環境をきれいにしたりと、当たり前のことを仲間と共に行うことが寮生活の楽しさでもあった。「同じ仲間のことを心配る」ということが寮生活で最も大切なことであり、そのことを寮生は皆、生活する中で身につくのだ。誰かが汚した環境も、自分がきれいにすることは一般的に苦痛なことであるし、連帯責任というのも迷惑な話であるが、私が経験した寮生活の仲間たちは、その苦痛を共有し、善を習慣化することで、仲間と共有し合う楽しみへと変えた。苦痛を共有するというのは、寮生活でしか出来ない経験だと思う。

大学入学前の、部活動も血反吐が出るほど厳しいものだったが、それはその部活をしたくて入った人たちしかいない環境であるから、乗り越えることができたが、寮というのは掃除やルールを守りたくて

入った者はそういはずだ。私自身、一人暮らしをしたかったが、経済的な理由で寮に入った。そのように、目的が違う者同士が、苦痛を共有し、楽しみに変えるという、素晴らしい環境にあると実感している。

また、寮の仲間たちは上辺^{うわべ}だけでない。掃除をするだけの付き合いでもなく、あいさつを交わすだけの仲間でもない。本当に私はこの4年間仲間たちに助けられてきた。授業の取り方が分からないときから、家族の不幸のときまで仲間がいてくれた。私が寮長として考え方が間違えているときも、先輩から夜通し説教をいただいた。そのときは、本当に部屋から出れないほど落ち込んだが、何も伝えていないのに別の先輩から励ましの連絡がきた。これも寮生活を送っている同じ仲間だからこそ培った人間関係であり、私の普段の状況を見てくださったからこそ、気づいた連絡なのだと思う。本当に感謝しています。

先輩方が、卒業し退寮するとき、私と同学年の仲

間で送り出しをした際、私たちは涙でいっぱいだった。そのときの感情を今でも忘れず覚えている。寮で出会った先輩方というのは、上辺ではなく心から甘えることの出来る関係だったと思う。先輩方のおかげで、寮生活の雰囲気や仕組みが分かったし、私の自律のきっかけとなった。私たち寮生の4年間は入学式からでなく、入寮日から始まり、寮の先輩方との出会いから始まった。このことが、私は誇りに思う。

私の中での4年間の大きな悩みの一つとして、異文化コミュニケーションがある。寮には多くの留学生がいて、多くの文化が飛び交っているのだが、日本の寮としてのルールや、文化を教えようと励んだのだが、強要することはしたくないこともあり、文化間の違いが大きくて頭が痛んばかりだった。他の文化との触れ合いというのもこの寮に入って初めての経験であったし、留学生の多くは年上の方なの

で、考えを曲げないのもあり、ルールを徹底することは難しい問題であった。しかし、私だけが正しいこと言っているという考え方をやめて、日本人だけで固まることをやめたり、交流できるイベントを増やしたり、相手の言い分も聞き、文化を受け容れることで、馴染みやすい関係になった。そのことで、毎週の掃除に参加してくれたり、自国の料理を持って部屋を訪ねてくれたりと異文化コミュニケーションが楽しく思えた。

不安から始まった当時の私だが、この寮のおかげで、多くの経験が出来た。寮に入り、「仲間がいる喜び」を心から学んだ。そして、学生寮というのは学生たち一人ひとりで作り上げていくものだとすることも実感した。そんな環境の中に4年間いることに、私は胸を張って寮に入って良かったと言える。最後に、毎日この環境を考えてくださっている皆様に感謝しています。

フロア・リーダーとして

天野 芳美

(英語・英米文化専攻4年)



私の寮生活は孤独から始まった。入寮時、当時の寮長やユニット長に温かく迎え入れてもらったけれども、私は入学時の様々な葛藤から寮での生活に大きな不安を抱えていた。気持ちが内向きになっていく所に新しい世界が現れた。それは留学生の存在だった。日本人であった私を頼ってくれ、寮での「自分の存在を知る」ことができたきっかけだった。一生懸命に日本語を学んでいる彼らの姿を見て、自分

も懸命に勉強したいという気持ちを強く持っていることに気づいた。この寮の魅力とは、様々な価値観を持った人々が共に何らかの形で依存して暮らしているという点である。異なる国の者同士が出会い、異なる年齢の者同士が共に生活する空間がある。同じユニットに住んでいるというだけで、一人ひとりが何らかの役割というか存在の意味がある。その役割や存在に気づき、自分を新しい角度から見つめたり、また「周りの人々の大切さを知る」ことが寮を真に楽しむために必要なのではないかと、この4年間の寮生活で感じた。

この1年間、私は的確に集団をまとめるようなり

リーダーではなかったと思う。しかしながら、非常に多くのことを学ぶことができ、充実した時間であった。他のリーダーとイベントの企画を行ったり、彼らと意見を交わす中で自分になかった考えを知ったことで、「もっと寮のことを考えなくては」と思うようになった。自分のユニットはひとつしかないけれども、リーダーの数だけ考えがあり、頼れる場所があった。この1年間、密接なユニット内の生活を通して、他のリーダーやユニットのメンバーのおかげで自分のことをより知ることができたし、周りの存在の大切さも実感した。この寮での経験は私の中でかけがえない時間である。仲間、寮を支えてくれる職員の方、4年間の大学生活を遠くで応援してくれた家族に感謝したい。



当に嬉しく思います。

「リーダーは1年かけて一人前になる」これは2年前に私が初めて寮長になった際、かけられた言葉です。今では私も多くの経験を積み、寮生だけでなく他のユニット・リーダーやフロア・リーダーにまで目を向けられるようになりました。麗澤寮はすべての寮生がリーダーを経験して卒業することを掲げています。これから先も新たなリーダーたちが生まれ、ますます発展していくことを願っています。



高橋 亜季

(英語・英米文化専攻4年)



私になぜ寮長になったのか思い出してみた。リーダー的存在なタイプではないし、皆の前で何かを発表することもあまり好きではない。しかし私は5号館(旧寮)がすごく楽しくて、大好きだったので、

尾田 あかり

(英語コミュニケーション専攻4年)



麗澤寮の魅力はたくさんあります。1〜4年生、年齢も出身も違う学生が共に生活を送り、その中で様々な経験を積むことができます。日々の生活のなかで異文化を体験することだってできます。各ユニットにはリーダーがいて、彼らはそれぞれ志をしっかりと持ち、日々寮生たちと向き合い、サポートしています。ユニットごとに違う個性を持つ素晴らしいリーダーたちがいることも、私たち寮生の自慢です。

私はフロア・リーダーの経験を通して、寮生たちの成長と共に自分の成長を感じることができました。2年前に私たちが迎え入れた可愛い後輩寮生たちが、今ではユニット・リーダーとなって一緒に活動しています。とても頼もしい存在で、4年間寮生活を送り、彼らのこのような姿を見ることができ本

ただそれを受け継いでいきたい、皆にも楽しい寮生活を送ってほしいという思いだけで寮長になったのだった。あれから約2年経ち、今感じるのは麗澤大学学生寮の寮長、フロア・リーダーになれたことにとっても誇りを持ち、感謝の気持ちでいっぱいである。

まず私が1年生の時の寮長の先輩方。明るく、面白く、今でもご飯に行ったり連絡を取ったり、相談に乗ってくれたりしてくれる。思いやりのあり、憧れの寮長であり、もし先輩たちに出会わなければ私が寮長になっていることもなかっただろう。そしてなにより1年間一緒に寮運営をしてきた12人の寮長たち、今のユニット・リーダーたちに感謝している。仲間のお陰で私は新たな自分を発見でき、私自身ちよつと成長したと感じるのだ。例えばイベントの主催者になったり、寮長の中の役割で会計をやり、寮長13人の誕生日を毎回祝ったり、飲み会の幹事をしたり、いろんな事に挑戦し経験し成長に繋がったと感じる。もちろんイベントの企画や寮生活での問題など大変なこともあったが、いい思い出にな

っている。

寮長になり、学生生活の楽しみが一つ増えた。そして一人ひとり个性的で素敵な仲間に出会えた。寮には学ぶこと、得ることが沢山ある場所だと改めて感じた。



高山美久

(英語・英米文化専攻4年)



「フロア・リーダー」になってから、私の中の寮に対する思いが明らかに変わった。そして、この役職に就くまでの3年間、ただ寝て起きての生活する場所だと考えてきた寮での生活がいかに無駄だったか、もったいないことをしてきたのかに気づいた。

フロア・リーダーとして初めて参加した谷川のセミナーで寮長経験者の体験談を聞いたときは、こんなにも私たち寮生のことを考えて運営してくれてい

たんだなど感激したと同時に、寮生活に対して消極的だったことに申し訳ない気持ちになった。しかし、私と同じようにリーダーの思いを知らない人や寮生活の本当の楽しさを知らない人がきつといるのではないかと思ったので、「一人でも多くの寮生にもっと寮を自分にとってプラスになる環境に変えてもらおう」ということが私の中でフロア・リーダーをするにあたっての目標になった。自分が経験したからこそ伝えたいことだったので、寮内イベントの告知に力を入れたり、普段の生活でも学年、国籍問わず積極的に話しかけるように心がけた。

共同生活において難しいことも多かったが、「寮に入ってよかった」と言ってくれたり、「このユニットでよかった」と言ってもらえたことがとても嬉しかった。私にとってフロア・リーダーの経験は非常に充実したもので、可能ならば全員にフロア・リーダーを経験してほしいと思う。



多持翔太郎

(英語コミュニケーション専攻4年)



私は3年生から2年間、寮長(2013年はユニット・リーダー)を務めていました。寮長になるとそれまで気にならなかった事が気になりました。寮で何か問題が起こると寮長の責任になります。ましてや留学生の多い国際寮ですから、価値観や文化・習慣の違いで悩むこともありました。ストレスで普段はしない一人酒をしたり感情が不安定になった時期もありました。しかし、他の寮長仲間と相談し、考えを話し合うことで、私はなんとかやっていくことができました。

中には、手のかかる子だっています。ですが寮長は、決してそのような子を見捨てられません。そうして後輩の面倒を見たり、同じ立場の仲間と協力していくことによって、寮生活の奥深さ、意義を悟ることができました。

寮生活は楽しかったことも多々ありましたが、決してそんなことばかりではありませんでした。辛いことも、理不尽だと思うこともたくさん経験しました。このような経験と真摯に向き合ってきたからこそ、様々な事を受け入れられるようになりました。し、問題を解決しようとする力もつき、何より寮生からの信頼という財産を得ることができました。今はユニット・リーダー制となってリーダーになれる機会が増えていきます。楽な仕事ではありません。しかし、志の高い寮生にはぜひユニット・リーダーを経験してほしいと思います。そこからどんな財産が得られるか、人それぞれ違います。やってみなきゃ分からない、のです。



久高聡太

(経済学科4年)



私たちは旧寮から新寮になるという節目(2013年)に、寮長からユニット・リーダーという新しい体制・環境に参加することが出来ました。新体制の中で初めてのユニット・リーダーとなり、不安や不満もありましたし、正直なところ今まで以上にユニット間での距離が近くなるために衝突なども生まれてしまうのではと感じていました。その中で私は、ユニット・リーダーの役目として、留学生も含め様々な個性がある寮で、個性を認め、つなぎ合わせて行く役割を意識し、皆が居心地の良いユニットになるようにと心がけ生活していました。旧体制の頃と比べると、人数が少なく顔を合やす機会が多くあるので、旧寮よりも家族のような雰囲気作り易い環境になったと感じました。

しかし、規律を守らせ、常にユニットをきれいに

保つという事を徹底出来ず、甘やかしてしまった事は反省として残りました。近い距離にいればコミュニケーションは勝手に取られていくわけですが、コミュニケーションを取らない人にどう対応するかという事を深く考えさせられた半年でした。人の話をよく聞いて、自分なりによく考えるようになったのは、このような経験に恵まれたおかげです。ユニット間の温度差、リーダーとしての格など、これからの人生に大きく役立つと確信する体験をさせて頂いたことを、本当に感謝しています。

今後、寮は大きく変わり、改善して行く事で、来年は今までより更に良い寮になって行く事を期待しています。



松岡良治

(経済学科4年)



現在学生寮では、グローバルな寮生活を実践しています。そのためにも、人と人のコミュニケーションを大切に、普段とは違う人間関係を築くことで形にはまらない柔軟な考え方が生まれてくると、私は考えています。異文化交流する中で各国に対しての知識が増え、寮という学校とは違う雰囲気学ぶ機会になります。寮生として日頃から規律ある生活を心掛ける事により自分だけでなく、周りを見る力や

第三者の事を考えて行動する力がかかります。

私も去年(2013年)から剣道部主将と寮長(現在はフロア・リーダー)の両方を務めさせていただきました。部活動と寮生活ではそれぞれ違う所がありますが、リーダーとしてお手本になる考え、知識、行動は共通している部分があり、今まで積み重ねた経験を迷うことなく実践してきました。

この寮生活を通して自主自立し、規律ある生活を心掛けることで、質の高いものにできると考えています。今まで学んだことを実践できるよう寮を築いていき、後輩に良き伝統を引き継いで、さらに新しい寮を創って欲しいと願っています。

親が見た「寮生の我が子」

— 麗澤大学の寮生活

千葉法明



遠方の大学に進学する過程で、学生本人また保護者の方が学業以外に一番心配し、考えることに「生活環境」があると思います。慣れない土地での大学生活を快適に送るために、もっとも重要なことだからです。

2010年4月、桜咲く並木を小雨の降る中、娘と少し緊張した面持ちで入学式に参列してから早4年が過ぎようとしております。娘は親元（仙台）から離れ自分の好きな英語をより深く学べるという夢と希望に胸膨らませていた様子でした。親の立場からは、勉学の環境は心配しておりませんでした。生活環境はどのような状況になるのかと心配してお

りました。特に女子ということで安全・安心な生活が送れるのか、そして留学生が大変多い大学ということで、信頼関係を上手く築けるのかなどと心配しつつ、アパートや下宿という選択もありましたが、一番安定し安心できる学生寮に入寮することを勧めました。娘はアパートで独り暮らしを希望していましたが、親の意見を聞き入れてくれました。

学生寮へ入寮したのは入学直前で、先輩学生に案内され約4畳半の緑の林に面した部屋に一緒に荷物を運び入れました。寮での食事は、各自共同台所で作るか、または学生食堂で摂る形式になっておりました。幸いに娘は料理好きでしたので、共同台所で

調理し一角にある食事部屋で食べていたようです。そこで同じ台所と冷蔵庫を使用するので、だんだん慣れてきた頃には友人とおかずを分け合い楽しく夕食を頂いたという話もしておりました。

各地から入寮した学生さんと仲良くなり、生まれ育った地方地方の方言や地元で当たり前に使っていた言葉が、方言だったと気がついて笑いあったりしていたようでした。入学したばかりの頃は、多分、何かと親を頼り頻繁に連絡してくると思っておりましたが、全く連絡がありませんでした。娘は大学の講義の流れや様々な授業に必要な教材の購入や準備、また寮生活でのいろいろな約束事や行事に没頭していたのでしょうか。

娘は3人姉妹の長女で、高校時代は演劇部に所属し協調性はありましたが、親としては少し心配でもありました。しかし、1年生の夏休みに帰省した時には思っていた以上に大学、特に寮生活を楽しんでいました。目を輝かせ高揚して私たち家族に話してくれました。講義の面白さ、英語劇の活動、そし

て寮生活のいろいろな面白いことや驚いたこと、楽しいハプニングなどを休みなく話す様子を見て、随分成長したなと感じました。

話の中には留学生のお料理の手際よさや、カレーライスが大鍋いっぱい作りカレーパーティーをしたことなど、たくさんさんの土産話がありました。また異文化に触れて様々な国の習慣や、一般に知られていない、その国の常識などに接し、国が違ってもこんなにも親密になれるのは、やはり寮のお陰だと思わずに思いました。

本学への進学志願には、高校の担任の先生が麗澤大学の丁寧な指導を知っており、「英語を学ぶならば、麗澤大学を」と勧められ進学した次第で、それはほんの半年前の事でした。帰省した元気な娘の姿に驚き、そして心から麗澤大学に進学して良かったと改めて思った次第です。

2011年3月に東日本大震災が起こり、それは2年生の春休みの帰省中のことでした。とにかく気丈に落ち着いて、水道、電気、ガスのない生活を仙

台で1カ月過ぎました。大学は大丈夫なのかと心配しながら新学期には何としても大学に戻りたいと、一心で交通手段を探し高速バスで大学に戻りました。無事に寮に到着したと連絡があった時は大変安心いたしました。

そして、2013年春に竣工した立派な新しい寮に移りました。新しい寮は今までと一変して新システムの寮となり、以前より更にセキュリティを重視し、学生は数人のユニットを作り、そのリーダーが各学生を円滑に仲良くまとめいくというものです。各ユニットには、1年生から4年生までおり、1年生にとっては分からないことや心配ごとなど、気軽に上級生に話しかけることができます。

またユニットには留学生もおおり、様々なコミュニケーションがとれます。寮は、一人部屋とはいっても知り合い同士が行ったり来たり、一緒に学習したり、いろいろな事柄について話し合ったりするそうです。

寮の規則はいろいろありますが、男子禁制なので当然のごとく父親といえども残念ながら、娘の部屋を見たことはありません。規則はあっても先輩の寮生を見ていけば皆お互い助け合うことが当たり前であることを理解できるのでしょう。娘は4年生になってユニット・リーダーとなり、寮生をまとめ、組織として運営する難しさも体験できたようです。多くの寮生の意見や要求などその他の問題を皆で話し合い解決してゆき、寮生にとってより良い生活のために、時には厳しい意見を発言しまとめ、皆を理解するべく奔走しているとのこと。

寮生活から学んだことは数えきれませんが、これから社会へ出て当たり前と思えることは、寮生活で身に付いたことかも知れません。寮は各地方からの学生さんと各国からの留学生の皆さんが集い、共同生活で一人では学べない多くの物を与えてくれました。寮を管理し警備して、寮生たちの安全・安心を見守って頂いた方々に改めて感謝申し上げます。

〈特集①〉寮教育

子供の成長を実感して

母の勧めもあって、私は麗澤瑞浪高校に入学し、寮生活を経験した一人です。田舎育ちで、世間知らずだった私は、正直言って、初めての寮生活は不安でした。4人部屋、言葉遣い、起床から朝礼、食事、授業、部活動、夕礼……と1日24時間のスケジュールがいっぱいでした。心の余裕など全くなく、緊張の毎日でした。寮に入った以上、「郷に入れば郷に従え」で、寮のルールを守り、寮内での人間関係を上手くこなしていくしかありませんでした。2年生になって、やっと寮生活にも余裕がでてきました。やがて3年を迎え、晴れて卒業。今にして思えば、麗澤瑞浪高校での3年間は、「大変だったけれ

ど、自己を成長させる場となったことは確かです。いい経験をさせていただいた」と感謝しています。

現在、私には3人の子供がおります。折に触れ、私は子供たちに高校時代の思い出(体験)を話していましたが、上の2人の娘は進学校として麗澤を選びませんでした。しかし、第三子である長男は、突然、「麗澤瑞浪高校に行きたい」と言い出したのです。その時は驚くと同時に、嬉しくも思いました。

息子の、麗澤瑞浪高校入学後は、まるで私が再入学したかのように頻繁に高校を訪れるようになりました。時代の流れとともに学校も変化してきていま

炭竈久代



した。校歌も変わっていました。当時と比べ、寮も随分快適になっていました。しかし寮歌は変わってはいませんでした。息子と一緒に寮歌を歌った時、とても懐かしく感じました。

私にとって子供が私にしてくれる最高の親孝行は、子供が社会の中で幸福に逞しく生きていく力を備えた人間になってくれることです。学校や寮は、そのような人間になるための知識を与えてくれるところ、そのような人間になれるよう、実際に体験させてくれる場所であると思います。子供には自分に与えられた機会を十分に生かし成長してほしいと願っています。

息子は麗澤瑞浪高校卒業後、2013年4月、麗

澤大学に進学しました。その年の12月、息子が帰省したとき、息子の成長を感じる出来事がありました。それは、自分から「お母さん、お墓参りに行くよ」と言い出したのです。私の嫁ぎ先の墓地には、我が家のお墓だけでなく親戚のお墓も近くにあります。息子はそれら一つひとつに思いを馳せていたのです。先祖が存在していたから今の私たちがあります。先祖のことを思うことから彼らの生きた時代を思うことにつながります。自分から進んでお墓参りをしてくれたことが、とても嬉しかったことです。高校・大学と7年間麗澤でお世話になることになりました。彼がどんな大人に成長するかがとても楽しみです。そして息子だけでなく私も成長できるように一緒に勉強をしていきたいと思っています。

〈特集①〉寮教育

寮生の成長を願い、サポートをする寮事務室

学務部学生支援グループ寮事務室

丸 知里



ユニット・リーダーと共に

2013年3月、寮事務室への配属が告げられた時、様々な気持ちで湧きあがりました。私自身が大学4年間お世話になった寮に関われる喜び、学生の生活により密着する寮で、より深く学生と関わり支援ができる期待で胸が高鳴りました。同時に、「グローバル・ドミトリー」として内外共に注目度が高く、新しく創造することが求められている寮で何ができるかというプレッシャーと不安でいっぱいでした。

この不安な気持ちが一気に掻き消されたのが、3

月下旬に谷川セミナーハウスで開催された「ユニット・リーダーセミナー」です。セミナーを通じて、リーダーたちの人柄、豊かな経験や寮に対する熱い思いを知り、一緒に寮を築いていく同志を得たような心強さを感じ、一気に不安が楽しみに変わりました。

セミナーでは、まず井出元学長補佐の講話から始まり、本学の学生寮の理念「自我没却神意実現の自治制」の「自治」について、「自分たちが治めている」「自分たちを治めていく」ことである、具体的にいうと「ユニットのルールは自分たちで決める」「相手の立場でものを考えること。自分を治め、品

性を磨くこと」だとお話しされました。この時に、私の寮事務室としての役割は、寮生の自治をサポートすることであると、肚に落とし込みました。その後、考えがぶれそうになった時も、寮の玄関ホールに掲げられている理念を見て、気持ちを立て直したことが何度ありました。毎月1回開催されるユニット・リーダー会議で、井出先生がリーダーへ送るメッセージは、私自身が寮生へどんな思いでどのように接するかを教え正してくださる機会であったと思います。

私が寮生と関わるうえで、心がけていることの多くは、リーダーや寮生から日々教わってきています。その一つが、あるリーダーが心がけている「寮生一人ひとりに声を掛ける」ことです。そのリーダーは、廊下ですれ違ったときに挨拶をする、集会室の電気がついていたらドアを開け皆に声を掛ける、挨拶にもう一言を添えることをしていたそうです。そのことにより、寮生一人ひとりの生活や状況を把握し、小さな問題を発見し、小さいうちに話を聞いて

のようなかけがえのない存在です。寮事務室でリーダーたちと関わっていく中で、彼らが毎日メンバー目を配り、ユニットのために日々考え悩む姿には、感銘を受けています。そんなリーダーたちのために、私も出来る限りのサポートをしたいという思いが強くなりました。

こうした経緯があり、私は、判断に迷う時、幾度となくリーダーへ問いかけることにしています。新しく行うことは教職員で勝手に決めず、まずリーダーの意見を聴くよう極力努めています。リーダーたちの意見をできるだけ尊重し、寮の管理や運営に活かしたいと思うからです。

寮生の成長を願う——学生による自治を目指して

約300名の寮生は、学年も、国籍も出身も様々で、文化や習慣、価値観も様々です。価値観の違いは、日本人と留学生の間だけでなく日本人の寮生同士にも生じ、この違いは交流にも衝突にもなり得ます。価値観の違いから生じる摩擦は、私が把握して

て解決をすることができたという経験を話してくれました。日頃からコミュニケーションが取れると、「提出物は出した？」と確認をとったり「今週は全体掃除に出てね」とお願いしたりするのも、し易くなったそうです。これは、2年間寮長を経験したりリーダーが、1年目に寮生が言うことを聞いてくれない悩み、自分から寮生へ関わりを持つ機会が少なかったことに気付き、改善して得た経験に基づく発表でした。これは、約300名の寮生を預かる寮事務室にとっても重要なことであると思います、寮事務室に勤務した日から、「挨拶」を心がけています。「おはよう」「行つてらっしゃい」「お帰りなさい」「最近変わったことはない?」「ユニットのメンバーはみんな元気?」「部活だったんだね、ゆっくり休んでね」などと、声を掛けています。日々の声掛けの積み重ねが、寮生が事務室へ相談や報告をしやすい雰囲気をつくり、些細な報告により未然に大きな危機を回避することができるのではないかと思います。

私にとって、ユニット・リーダーは、パートナー

いる以上に、課題の大きさは問わずユニット内で日々生じていると想像します。しかしその中で、寮生が気付き、話し合い、受け入れ、解決していく過程に、大きな成長があると思っています。

トラブルの相談や報告は、寮事務室にも寄せられます。上記の通り、ユニット・リーダーからの相談の場合には、答えを与えず、一緒に考え、解決するプロセスを意識しています。答えを出すことは急ぎません。状況を確認し、課題を整理し、他のユニットの解決事例を紹介したり、考える視点のヒントを与えたり、その過程で「あなたはこうする?」「あなたならどう考える?」と問いかけます。そうすると自ずと、リーダーの中に答えが生まれてきます。その答えが正解かどうかは分かりません。「まずやってみよう。うまくいかなかったら、また考えよう」と、ポンと背中を押します。なぜならば、私自身、学生時代に失敗の経験から学んだことがたくさんあり、トライ&エラーのトライする気持ちと行動が大切だと思うからです。

寮生の成長をサポートする

学生支援グループ寮事務室 加藤 和次

寮事務室勤務となり、はや6年が過ぎようとしています。

2013年3月に新寮「グローバル・ドミトリー」が完成、寮事務室スタッフに丸知里さんが加わり、4月から学生寮がスタートしました。

新寮への寮生の受け入れ、親元を離れて初めての寮生活となり、生活環境が変わり、体調を崩す新入寮生も多く、健康状態確認のためにも毎朝の声かけを心がけています。

また、設備・備品等の不具合などで寮生活に支障をきたさないよう心がけています。

★ ★ ★

学生支援グループ寮事務室 加藤 愛子

2011年3月11日 東日本大震災の日。

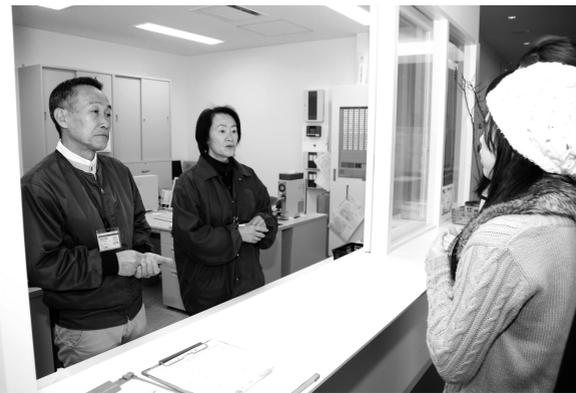
女子寮門前に立っていた私と、一緒にいた女子寮生との会話。

「皆、避難場所に行ったから、あなたも行きなさい」

「加藤さんの所に居たら、安心だから」との返事。

胸に熱い想いを感じた瞬間でした。

寮が建て替わり、寮生と同じ棟に居住し、何かあった時はいつでも駆け付けられるので、その時の想いを忘れず、楽しみながらお世話をしていきたいと思っています。



リーダー以外の寮生からの相談や要望もありま
す。ユニット内のことであれば、まずユニット・リ
ーダーへ相談すること、ユニット内で話し合うこと
を促します。ユニットのことは、ユニット・リーダ
ーを中心に考え、自分のユニットも「自分たちが治
める」(自治)を目指してほしいからです。これ
は、リーダーも同じで、ユニット・リーダーよりフ
ロアに関わる問題による申し出であれば、フロ
ア・リーダーを中心にそのフロアに住むユニッ
ト・リーダーで話し合うように、と伝えていきます。
日々の窓口対応では、寮生一人ひとりの違いは、「
個性」と受け止め、申し出の背景にある思いを聞
き、その思いに寄り添い、一人ひとりにあった対応
を心がけています。申し出の背景は、人それぞれだ
からです。中には、提出物が遅い寮生、寮規則を守
れない寮生、寮の秩序を乱す寮生もいます。注意を
すると嫌な顔をするのを分かっているのに指導する
のはこちらも胸が痛くなりますし、できればしたく
ないものです。しかし、学生一人ひとりの成長を願

い、なぜそれをしなければならぬのかの理由を添
えて、指導するように努めています。一度言っ
てきかない寮生には、繰り返し伝えます。
あるユニット・リーダー会議で、田島正幸学務部
長がリーダーへ次のような話をしたことを思い出
します。「もし、ゴミ捨てを忘れる寮生がいるら
ば、何度でも言いなさい、一緒に捨てに行くのも
いいでしょう。直ぐに結果がでなくても。母親は子
どもに箸の使い方を教えるのに、何十回も繰り返
すからね」と。私も、長い目で寮生の成長を願
い、愛情をもって接していきたいと思えます。
父親、母親のような加藤ご夫妻
加藤ご夫妻は、学生寮のお父さん、お母さんのよ
うな存在です。寮生の安全を守り、より快適な生活
を送れるよう、また、健康と成長を願い、厳しくも
愛をもって寮生と接していらっしゃいます。
和次さんは特に、寮内の設備管理や安全管理を担
当され、寮内の不具合を見つけては直ぐに修繕の手

配をし、寮生から「排水溝が詰まったので見てくれませんか」「お風呂の電気が切れたのですが、電球はありませんか」など寮生の生活に関わることは、不自由がないようにとすぐに現場に向かいます。

朝は、玄関やホールの掃除をされ、授業へ向かう寮生へ「おはよう」「行つてらっしゃい」と見送ります。その中で、体調が悪そうな寮生を見つけては声を掛け、状況に応じて、病院へと送迎します。その姿はまるで本当父親のようで、大切なお子様を預かっている意識を人一倍もっているように感じます。

愛子さんは、寮内の美化に務め、寮生への掃除指導も行っています。以前は週1回、台所、浴室、トイレなど水周りには清掃業者が入っていました。新体制になりすべて寮生が行うことになりました。掃除用具の使い方を紹介し、寮生と一緒にバスマット・リーダーへ指導し、ユニット・リーダーがメンバーへ指導できるようにしています。46ユニットすべてをまわり、1ユニットにつき1時間程かけ、懇

切丁寧に指導しています。時間はかかりますが、「自らきれいに掃除し、清潔に保つこと」を目指している、とおっしゃっています。

また、寮生だけでなく、寮生の部屋を訪ねてくる友人の挨拶教育も丁寧に行っています。寮生以外が入室・退室する際、「訪問者名簿」に名前を明記するために事務室へ立ち寄るのですが、「おじゃまします」「おじゃましました」の挨拶を促します。「窓口だけでなく、ユニットに入るときも、人の家に入ることと同じですから、挨拶をしてくださいね」と。最初は面倒くさそうに、恥ずかしそうにしていた学生も、次第に笑顔で、当たり前に見えるようになってきました。これも、根気強い指導の成果だと思えます。ある時に、「両親に教わっていないこと、言にくいことを、私が伝えなければ。きっと家庭をもったときに役立つから」と、私に思いを語ってくれたことを思い出します。

加藤さん夫妻は、学生寮に勤務し6年が経とうとしています。本当の両親のように感じる寮生もいる

ようです。自分がやりたいことと両親が望むことの2つの進路で悩んでいたある4年生の女子寮生が、愛子さんに相談したとき、「親はね、子どもがやりたいことをやることを、何より望んでいるのよ」という言葉が、まるで実の母親に言われたようで、涙があふれました、と語ってくれました。

困ったときに側にいてくれる兄・姉のようなチューター

「生活面および学習面でのきめ細かいアドバイスができるよう」チューター制度を導入し、本学の卒業生で寮生活を経験している末田雅裕さん（男子棟）、連宜萍さん（女子棟）が、寮生と生活を共にし、夜間や緊急時の対応を行っています。

諸事情により門限以降に帰寮した寮生や鍵を紛失してしまった寮生への対応、ブレーカーが落ちた部屋の復旧作業など、多岐にわたります。夜間に体調が悪くなった寮生に付き添い、病院へ行くこともありました。夜間も頼れるチューターがいることにより、寮生は安心して寮生活を送れるようです。

また、寮内会議、企画会議や寮生主催行事にも積極的に参加し、スポーツ大会では汗を流し、演劇では舞台に出演するなど、寮生と共に密接な時間を過ごすことで、寮生一人ひとりを把握しています。寮生にとっては、些細なことでも気軽に相談できる大切な存在のようです。チューターより報告を受ける寮生の声から、年の近い兄や姉のような存在だからこそ言えることもあるのだと思えました。チューターは、寮生と事務室を繋ぐ架け橋のような存在です。

寮生を支える教職員

学生寮は、多くの教職員が見守り、サポートしています。ライフラインの点検、消防設備点検、施設の修繕などを行う施設課や24時間体制で寮の警備を行う警備センター、寮教育のあり方を検討する教職員、ここではお伝えしきれないほど多くの方々が、幅広く関わっています。

この数年で連携が深まっているのが、学生相談センターのカウンセラーです。谷川セミナーハウス

(群馬県)で行う2泊3日のユニット・リーダーセミナーや、月1回開催するユニット・リーダー会議にも出席いただいています。セミナーでは、ユニット・リーダーとして、メンバーの相談にのるときに必要な傾聴スキルを、実際にワークをしながらカウンセラーから学びました。ユニット制になり少人数でいつもでも顔を合わせる密接な関係になり、今まで見えなかった問題が明らかになり、悩みを抱く寮生も増えていくだろうと予想しています。このような環境だからこそ、カウンセラーとより近い関係が築けてきたことは、寮生にとって心強いサポーターを得たと感じています。

結びとして

私は、学生寮で一生活き合っていた先輩や友達に出会いました。初めて親元から離れ自立への一

歩を見守ってくれる教職員がいたおかげで安心して生活ができました。寮で得た楽しいことも辛い経験もすべてが、糧になっています。様々な価値観をもつ寮生との共同生活は、私の引き出しを増やし、器を大きくしてくれました。寮で培われた経験は、社会で活かされています。これまで、麗澤会や業務を通じて出会った諸先輩方から学生時代のことを伺うと、決まって寮の話題が上がります。「理不尽に感じていたことすら、良い思い出であり、それこそが今に生きているよ」「麗澤での寮生活での経験や学んだことが、現在仕事や人間関係にも役に立っている」というお話を幾人から伺いました。寮生も、いつの日か大学生活を振り返ったときに「寮での経験が活かしているな」「寮での経験があるから、これも乗り越えられる」そんなふうに思い返してくれたらいいなあ、そう祈るばかりです。

〈特集①〉寮教育

麗澤大学の寮生活で学んだこと

経済学部教授

堀内一史



2014年1月9日から11日まで英国オックスフォード大学のオリエル・カレッジで開催された、バリーミング大学人格および価値ジュビリー・センター(The Jubilee Centre for Character and Values)主催の第2回国際大会(総合テーマ:徳は測定できるか?)に参加し、本学の道徳教育の成果を評価する方法論の一端について発表する機会をいただきました。私の専門は宗教社会学ですが、本学の道徳科学教育センターの研究者としてこの大会に参加しました。

ご承知のようにオックスフォード大学は12世紀に創設された、全寮制の伝統ある大学です。大会の会

場となったオリエル・カレッジは、5番目に古い大学で1324年に創立されましたが、内部の改装はたびたび行われたにしても、建物自体はおよそ700年の歴史があります。伝統の重みをひしひしと感じました。

翻って本学の寮はといえば、英国ウエリントン・カレッジを模したものとわれますが、気候風土の相違もあるのでしょうか。耐久年限を過ぎたために、昨年(2013年)の新しい寮の開設に伴い私が学生時代を過ごした旧寮はすでに跡形もなく解体され、キャンパスの様子は一変しました。

今はもう存在しないかつての寮に入ったのは、1

973年の4月のこと。麗澤高校でも寮生活を経験していた私にとって、大学での寮生活はあまり新鮮な印象がありませんでした。ましてや、私たちの同期（麗大36期）は麗澤高校と麗澤瑞浪高校から来た学生が全体の8割を占めていたわけですから、そう感じるのも当然です。しかし高校時代の、あの規則に縛られた生活から一転して、緩やかで自主性に基づいた、その意味で自由な、あの当時の大学寮の雰囲気は好きでした。

当時麗澤大学は外国語学部のみ単科大学で、イギリス語学科、ドイツ語学科、中国語学科の3学科のみでした。各部屋には、同じ学科の学生3人が割り当てられていました。確か、隣は中国語学科の部屋だったと記憶しています。中国語学科の部屋では毎晩中国語の基本的な発音練習が行われ、その声が壁越しに聞こえてきます。大きな声で先輩と一緒に発音練習するという、麗澤大学中国語学科ならではの方法でした。

イギリス語学科とドイツ語学科にはそのような伝中駿平先生のご自宅でシェイクスピアの輪読会が開催されていて、何回か参加しました。その輪読会に誘ってくださったのは、当時3年生の中道嘉彦先生でした。16、17世紀に書かれた英文を読むのですから、注釈なくしてはとて理解できません。しかしこの輪読会は、4年生の時に一度だけ出演させてもらった英語劇「ジュリアス・シーザー」では大いに役立ちました。

隣部屋の中国語学科の部屋長がラグビー部員で大柄な方でした。彼の部屋に入るとすぐに目に入ってくる光景は、部屋の中央に堆く積まれた、新聞また新聞。他にはほとんど本らしいものは見当たらず、本棚には中国語の「合本」と呼ばれる教科書など数冊ならべてあるだけです。朝食後は朝刊、毎夕ラグビーの練習を終えて帰宅したその部屋の部屋長は夕刊を隅から隅まで読んでおられました。その先輩はその後、読売新聞社に就職されました。

モラロジの勉強会に参加させていただいたのも、寮生活の賜物と言えます。あまり熱心なメンバ

統はありませんでした。私の属したイギリス語学科では「Early Morning Class」というものがあり、朝の1限目の授業が始まる前に若手の先生方が教室で待っておられ、会話の練習をしたものです。

私は先輩や同級生に恵まれていました。部屋の最年長の学生に対する呼称が「部屋長」で、1年生が「部屋っ子」、そしてその中間的存在は「部屋中」と呼ばれていました。私の最初の部屋長が大変勉強熱心な方で、仲の良い先輩なども一緒に、入学したばかりの私を神田の古本屋へ連れて行ってくださったのです。そのときに、今なお英文を書くときや翻訳をする際には大いに役立つている研究社の『英和活用大辞典』（現在のものは新編です）を紹介してくださいました。今振り返って、寮生活において何が私自身の人格形成に最も大きく寄与したかと問われれば、その一つは、やはり、寮で寝食を共にした先輩が、勉強に対する模範を示してくださいましたということになります。

1年生当時大学と同じ敷地内にお住まいだった田一ではありませんでしたが、加藤清先生が主宰されていた論文研究会（『道徳科学の論文』の輪読会）や川窪啓資先生の英文モラロジ研究会などに寮の先輩や友人に誘われて参加しました。当時これらの研究会で活躍しておられたのが、現学長の中山理先生、そして私と同期で、現在麗澤瑞浪高校で英語を担当しておられる野中康弘先生でした。（当時私は、運動系では剣道部に属し、同時にESSにも所属していましたので、結構忙しい毎日でした）

いずれにしても、英語や学問に対する探求心、さらには倫理・道徳への関心、求道心のようなものの基礎を培うことができたのは、他でもない、麗澤大学での寮生活であつたろうと思います。

最後に、一つ触れなければならぬ、大切なことがあります。それは、人を思いやる心と寮の風土です。先述のように、高校での寮生活とは異なり、大学寮の規則は緩やかでした。本学の寮生活のモットーは、「自我没却神意実現之自治制」です。寮生のことを互いに気遣う気持ち、相手の幸せを願って人

を大切にするという価値観が共有されていなければ寮という社会はただのアパートと化してしまいません。その意味では、寮長会での議論は大変意義深いものでした。普段は日常のルーチン化した出来事の報告に終始しがちですが、一旦問題が発生すると寮生のことを第一義的に考え口角泡を飛ばす白熱した議論となります。あれほど、他人のことについてあれこれ考え議論したことはないと思うほど、充実していました。時には、時間内では収拾が付かず夜遅くまで話し合ったこともありました。こうした経験が、その人物の後々の人生に影響を与えないはずがありません。

今年1月に私がオックスフォード大学を訪れたときに感じた歴史や伝統の重みは、何世紀経ってもデ

ンと構えている石造りの西洋建築が醸し出す、独特の雰囲気です。これに対して、日本には古来より、ある一定の期間を経て建物を建て替えて受け継いでいく伝統というものがありません。遷宮という伝統です。昨年は伊勢神宮の20年ぶりの式年遷宮の年でした。出雲大社も60年ぶりに装いを新たにしました。

本学の寮生活は、建学の精神である「知徳一体」というものを実践する場として、長きにわたって営々と営まれてきました。この理念を中心に本学には寮の風土が形成され、受け継がれてきています。この、人を思いやるという本学の「寮の風土」は、たとえ建物が新しくなっても、長く伝えていきたいものです。

〈特集①〉寮教育

寮生活の経験と麗澤教育

(株)ジュピターコーポレーション

濱井利一

(第29期 イギリス学科卒)



麗澤大学での入学式は、「大講堂」と呼ばれる建物の中で行われた。大講堂は、現在の廣池千九郎記念講堂の場所にあった。その入学式で、学長の廣池千英先生は、憂国の祝辞を述べられた。「今日の我が国は、物質的には多少豊かになったが、残念なことに心の貧しい国になり下がってしまった」という主旨であったように記憶している。

荷物を運び込んだ学生寮の部屋には、3人の先輩がすでに入室しておられて、私の眼には、彼らがあるかに年齢の離れた大人のように見えた。部屋の2段ベッドの下の段は、3年生と4年生がそれぞれ使用されるとの事なので、2年生と私は、それぞれの

上の段のベッドにふとんを運び挙げた。

高校時代の灰色の受験生活から解放されて、勉強をするでもなく、学生寮を歩きまわっていた私を、ある先輩が呼び止めた。「モラロジの論文を勉強するサークルがあるから、顔を出してみないか」というお誘いであった。私の父は昭和27年からモラロジの勉強をしていて、我が家でもモラロジの勉強会が開催されていたが、私はモラロジというものがどのようなものなのか、全く知識がなかった。

「一体、父が勉強しているモラロジとは、どのようなものだろう」と興味半分、先輩から誘われた「論文の勉強会」に顔を出して見た。会場である学

生集会場の和室には、20人くらいの学生が車座になって、モラロジの論文を輪読し、リーダー格の先輩が解説をするという勉強会であった。論文の中に次々に出てくる世界の聖人の名前を聞いて、私は内心驚いた。一人の聖人の研究に生涯をかけても、一生の内にその研究を完結できるかどうか分からないはずなのに、モラロジには諸聖人の教えのエッセンスが入っているという先輩の説明に、私は大いに興味をそそられた。この勉強会への参加がきっかけとなり、サークルの顧問をしておられた加藤清先生とのご縁が生まれた。

気がついた時には、私は学園内の加藤先生のお宅に、たびたび訪問するようになっていた。先輩や同級生たちと一緒に訪問することもあれば、一人で伺いすることもあった。厚かましい私たち学生の訪問に、先生は嫌な顔もされずに、いつも快く私たちを受け入れて下さった。先生のお宅では、サークルの勉強会を持ちあがった疑問点を質問したりして、授業では味わえない有意義な時間を持つことができ

最中に、昭和天皇から至近距離で受けたご会釈は、とても感動的であった。陛下のお姿を目にしただけで、私の両眼から熱い涙がとめども無く溢れ出して止まらなくなった。私は故郷の福井県で、戦後の公立学校の教育を受けただけで、天皇や皇室についての知識はほとんど白紙の状態であった。それにもかかわらず、陛下のお姿を目にした途端に溢れ出した涙に、私自身が「なぜ自分はこのような反応をするのだろうか？」と当惑していた。

私の大脳皮質は、この想定外の状況に、全く判断能力を失っていた。それと同時に、私の全身の肌が、乾いたスポンジが水を吸い込むように、陛下から発信される電波を吸収していた。そして私は言葉とは全く別のシグナルを通して、「天皇陛下はとても大切な人」だということを理解してしまった。そこには言葉による説明などが必要ななかった。大脳を通して理解ではなく、肌を通して理解であった。それ以後の私の人生において、「なぜ天皇陛下が偉いのか」とか「なぜ陛下を大切にしなければならない

た。

私はイギリス語学科に所属していたが、灰色の受験勉強時代から解放されて、クラブ活動や寮生活を楽しむつもりでいたので、勉強はあまり熱心ではなかった。私が入っていた学生寮は、イギリス語学科の寮であった。私たちの寮の隣は、中国語とドイツ語学科の寮であった。中国語の学生たちの、勉強に取り組む真剣な姿勢は、他人事ながら「凄い」と思った。その日の予定は全て終わり、そろそろベッドに入って眠ろうかと考えている夜中に、隣の中国語の学生寮から、毎晩のように大きな声が聞こえてきた。彼らは中国語の「四声」を訓練するために、学生寮の建物の屋上で大きな声を張り上げて、発音の練習をしているのであった。そこには私の同級生で、現在も大学で活躍されている学長補佐の井出元先生やモラロジ研究所の黒田光先生が、私が寝ている間も、発音の練習に励んでいたのであろう。

麗澤大学在学中に仲間と一緒に経験した「皇居勤労奉仕」も、忘れ難い思い出であった。勤労奉仕の

のか」という言葉の説明は全く必要がなかった。あの経験は、私の人生の宝物になった。私が受けた4年間の麗澤教育に、不思議な生命が吹き込まれたような気がした。

大学を卒業して社会人になるに当たり、恩師の加藤先生に進路についてお尋ねすると、先生は東京の、とある貿易会社を勧めて下さった。私は何の躊躇も無くその会社の入社試験を受け、試験をクリアしてその会社の一員になった。早いもので、今年で会社入籍43年目を迎えた。入社して4年目に、私は会社の米国法人に出国を命ぜられ、米国で10年間の駐在員生活を送った。渡米2年目の昭和50年に、昭和天皇皇后陛下が米国を訪問された。ホワイトハウスでの公式歓迎晩さん会での陛下のスピーチは、全米に深い感動を与え、米国民の歓迎ムードが一挙に高まった。私は仕事の出張に向かう飛行機の中で、米国人の乗客から「あなたは日本人ですか。あなた方日本人は、素晴らしい人格者である天皇陛下を国家元首に戴いて、本当にお幸せですね」と握手

を求められた。私は予想もしなかったその言葉に、お腹の底から「私は日本人で良かった」と、日本人としての誇りと喜びを感じた。この「誇りと喜び」は、時間の経過とともに、私の心の中で変化した。私が昭和天皇から、個人的に激励されたような感じに変化した。「君は日本人として、このアメリカで、胸を張って、正々堂々と頑張れ」。ドンと背中を叩かれたような気分になった。あの昭和天皇の、私への個人的な激励のお陰で、私は10年間の米国駐在を頑張ることができたのだと、今でも強く信じている。天皇陛下が見ていて下さるのだから、日本人

として恥ずかしくない行動をしようと思った。私たち日本人が人間として恥ずかしくない行動をすることが出来るのは、いつも私たちのことを神様や天皇陛下が見ていて下さるからだという考えが、私たち日本人の心のどこかに宿っているからだろう。だから3・11の被災者も、人間としての節度を守る気高さを、世界が称賛したのだろう。このようにして、自分の歩んできた人生を振り返ると、その源は麗澤大学の寮生活にあった。私たちが麗澤教育から受けた大きな恩恵に、改めて感謝したい。

〈特集①〉寮教育

「出会い」ということ

——私にとっての寮生活の意義

麗澤大学名誉教授

生方徹夫



二度目の短期大学

昭和28年、当時の私は、今でいう「ニート」であった。地方の国立大学を2年で中退し、東京へ出たというただそれだけの理由で、あこがれていた船乗りの無線技士になる希望を抱いて母を説得し（父は既に故人だった）、母の知人宅（横浜在住）に転がりこんだ（この恩人も既に幽明境を異にしている）。私にとっては、生地九州という島を出るだけでもよかったのだ。

そのころ、私の耳に風評として届いたのは、千葉県に短期大学だが全寮制で農業をしながら道徳を学

ぶところがある、というものだった。外国語は余り得意ではないけれども、何とかなるだろうと、今度は母の同意も得て、受験することにした。たぶん「なにか」を感じたのだろう。それは、今も分からないが、心の底にずっと生き続けているような気がする。

合格して入学してみると、1学年40人だから全校80人ほど。一部屋に3人で、2年生が2人だった。三重県と滋賀県出身の先輩である。私は九州という島の佐賀出身である。そのことについての違和感はいくらもなかった。ただ私の佐賀弁は余り出なかった。理由は、私自身の性格にあった。故郷の方言を丸出

しにするのを憚る気持ちだけから、標準語に近いと思う言葉遣いに努力した結果であった。

この私の姑息なためらいを嘲笑うがごとく、当時の麗澤短大の寮では、東濃弁（岐阜県下の東部一帯に行われている方言）が蔓延していた。恐らくその地方の出身者が多かったためだろうと推測している。「方言を憚らない」ということは、その地方の特色なのか、あるいは個々人の性格の故なのだろうか。今もって不明だが、こちらもそれに染まりそうなほどだった。

さて、入寮してみると、寮長であり学友会長である先輩ともう一人の2年生の3人部屋であった。後になって分かった事だが、卒業生で、私と同じように三年遅れで入学したある先輩が話してくれた。その先輩も年が上だけに、寮生活を同僚とうまくやっていけるかということ、入学試験のときから問題になった、と話してくれた。それはそのまま私に対する先生方の配慮があったことを物語るものであった。私は入学の初めから、心を煩わせる存在であった。

たのだと、後年になって気がつく始末である。

「洗面器メシ」

当時は、終戦後で食糧事情が悪く、配給制度で「米穀通帳」というものを持参しなければならなかった。そこで「飯盒炊飯」ならぬ「洗面器メシ」の登場である。どこかの田舎から米が届く。寮に鍋や窯はない。そこで登場するのが、金属製の洗面器である（当時はほとんど金属製で現在のプラスチック製などなかった。もちろん洗面や入浴に使用したものである）。米を研ぐと、もう一枚の洗面器を逆さにして窯にする。これで案外うまくメシが炊けるのである。炊きあがると、そのままひっくり返してむらす。とにかく、ご飯が炊きあがると、醤油をぶっ掛ける。当時は食堂から持ち出したスプーンを「武器」と称して各自が隠匿していた。それを持って廊下に集合する。とにかく、配給時代だから寮生は空腹である。「洗面器メシ」は、アツという間である。これをイーティングと称した。

廊下の囲碁

廊下で思い出すことがある。それは「囲碁」である。基盤といっても足つきの立派なものがあるわけではない。いや、一面くらいはあったかもしれないが、いずれにしろそれほど立派ではない。どういった経緯で寮生活の中に広まったかは知らないが、寮の廊下には指しかけのままに、閑散とした授業の合間の陽射しを受けて、基盤が一つ以上はあった。授業の合間といえば、せいぜい10分であるが、その間にも盤面に向かうつわものがいた。それほど囲碁に凝ったものである。私も人後には落ちなかったが、大して上手にはならなかった。半世紀後、大学定年後のためにと、町の碁会所にも顔を出してみたが、余りの棋力の違いに匙を投げてしまったことである。未だに下手の横好きにも至らないままである。

学長の倫理学

廣池千英学長自ら「倫理学」の担当であった。当

時の麗澤短大は2年制だから、教室は2つで済む訳である。しかし、倫理学の授業だけは、大講堂（現在の廣池千九郎記念講堂）であった。このときは、教職員の方々も一緒に聴講されていた。確かテストはなかったのではないかと記憶している。あるいは、将来の希望を聞かれたのが、テストであったのかもしれない。

麗澤短期大学を卒業後、大阪での丁稚修行を諦めて、廣池学園にお世話になる経緯は、『恩師廣池千英先生』（1972年7月15日刊・麗澤会）に、「8ミリとモクセイの香」というタイトルで、その恩恵の一端を記している。千英先生には終生償い得ないほどの恩義がある。

鎌倉の台風

外国語学部だから、英語は当然ながら、その他の中の「ドイツ語」を選択した。その担当の伊藤庸雄教授は、ご自宅が鎌倉であった。当時は現在の校舎「かえで」が建つ一帯から学生食堂にかけては、

雑草の生える自然のなだらかな丘陵で、この中に立つ松の木が、実際より高く見えた。ドイツ語の授業は、しばしばその丘で開かれた。学生が先生を誘うのであるが、半ば強制的でさえあったかもしれない。季節には、栗拾いになることもあったが、バケツいっぱいのお菓子を教授の家苞にしていたこともある。いかに自由な学生生活であったかを知る追憶ではある。

この伊藤教授については懐かしい思い出がある。(寮生活とは少し離れるが、お許しいただきたい)話は数年後に飛ぶ。麗澤短大を卒業して大阪の布帛問屋に就職が決まっていた私は、大阪での丁稚修行を諦めて、学長・廣池千英先生の「困ったときは、いつでも訪ねて来い」という言葉を便りに、廣池学園に帰ってきていたが、まだ決まった職場とてなかったところである。既に11月であったかと思う。園内のどこかで伊藤先生にお会いしとき、時季はずれの台風が近づいていた。現状を話す私に、伊藤先生は鎌倉の自宅へ誘ってくださいました。そのまま、鎌倉まで教授に同

行した私は、教授宅に一宿一飯の恩義を受けることになる。こうして台風の接近は、私を鎌倉に引き止めてしまった。帰るに帰れなくなってしまったのである。

一夜明けると晴天であった。しかし、教授の自宅は一面に水に囲まれていた。伊藤教授には、こうした事態のご経験があったらしく、それに対処する施設がしつらえられていた。庭のどこかに排水のための穴が設置されているらしかった。水没した庭に脛まで浸かりながら、その穴を探すのが、その日の私の役目であった。それほど広くない庭だったので、水抜き穴は、間もなく見つかり、庭は、その面を地上に見せてくれた。

台風一過の朝食の膳には、オチヨコがついていて、私もオコボレ頂戴ということになった。小さい猪口なので、いやでも一息で口の中に入れてしまふ。途端に「君、そんなに一気に飲んじゃだめだよ」と、ご注意である。恐縮しながらも、好きなものは仕方ない。ついつい盃を重ね、大学の講義に出

かけられる教授をお見送りした。

演劇二つ

いずれの大学にも存在する大学祭を「麗陵祭」と称し、そこでは、英語劇が伝統として続いていた。これは今でも継続しているし、学内に小劇場なるものも存在している。一方で演劇好きの面々が活動と発表の場として、大学祭に演劇を発表していた。これに参加できない人を糾合して何かやるうということになった。愛知県出身のT君の提案で「義民甚兵衛」をやることになった。監督と演出を買って出た私は、それから級友を稽古に駆り出すのに苦勞することになる。全寮制であるから、土・日曜は外出しなくてウズウズしている連中を練習のために引き止めなくてはならないのだ。

それからもうひとつ、2年生になってから、折角

だから、習ったドイツ語で劇をやるうということになった。英語劇の向こうを張ったつもりである。これには私の失敗談が付いている。例のごとく演出を買った私は、ドイツ語が良く解っていないかったせいもあって、場面の転換のところで、自ら幕を引いてしまった。そのミスに気づいた私は、幕をあげて誤魔化したつもりであったが、観客もすべて気が付いていたのだ。それでも、麗澤におけるドイツ語劇の創始ではなかったかと、密かに自負している次第である。

ともあれ、麗澤短期大学における寮生活は、私にとっては「出会い」の大切さを考えさせられ、大きなエポックになった時期であることは間違いない。今もその事に感謝し、83歳の誕生日を迎えようとしている。

もうひとつの“女子寮”

全寮制であった昭和49年、学生の増加に伴って新しい寮を建てることになり、学内で建設工事が始まりました。しかし、新学期が始まった時点で既設の寮は満員状態。完成までの期間、入寮できない女子学生が出てしまいました。そこで、寮に入ることができなかった女子学生は、前期と翌年の後期に分かれ交代で10名ずつ、麗澤館の敷地内にあった寮に間借りをすることになり、もうひとつの「女子寮」が開寮されました。

澤館の寮に入ったことのある卒業生たちは一様に「寮しかった」と、当時を振り返ります。既設の寮は6人一部屋であったのに対し、麗澤館の寮は2人1部屋でしたが、部屋割の区別もなく、まとまって行動することが多かったようです。食事のために食堂へ赴くのが一緒なのはもちろん、全員参加の行事であった「遠歩き」（半日ほどかけて筑波山などを歩く）でも、まとまって行動したり、自ら「麗澤館ガールズ」と称して、学内イベントにも参加。10名での生活を満喫しました。

当時の麗澤館には、二代学長・廣池千太郎先生が住まわれており、しかも創立者廣池千九郎博士に関連する資料も多数所蔵されていたため、道徳科学を志す人々たちにとって憧れの場でもありました。

また、このときの寮生にとって思い出深いことは、道徳科学に裏打ちされた「人と人との繋がり」「人の温かさ」を肌で感じることであったことだと言います。百聞は一見にしかずで、麗澤大学に入学するまで道徳科学にまったく触れたことがなかった学生も、道徳科学を学んだ学生と、まさに「一つ屋根の下」で暮らすことによって、たくさんの文献を読んだり講義を聞くこと以上に、道徳教育の素晴らしさを実感できたのでしよう。

「当時、そのような特別なところに住まわせていただいている、という意識はほとんどありませんでした。ある日、賑やかにおしゃべりをしながら帰ってきたとき、入口の木戸の所で、中（麗澤館正面）に向かって丁寧に礼をされている方を見かけて、はじめて自分たちの境遇を実感しました」

このときの寮体験を機に、道徳科学の勉強を深めた人もいたそうです。そこでの貴重な寮生活を体験した

20名は、それぞれに様々な思い出や気づき、成長を得たことでしょう。

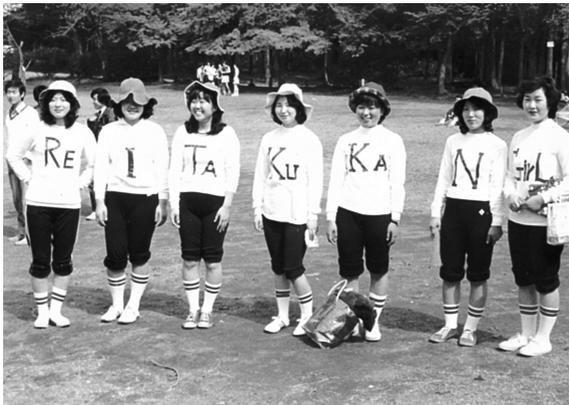
ようか。

残念ながら、もうひとつの「女子寮」は現在は存在しませんが、当時に想いを馳せながら、この寮の跡地や現在の新しい寮の周りを散策してみてもいかがでしょう。

※杉本真佐子さん（旧姓・志賀、第34期）、田中芳子さん（旧姓・西尾、第37期）からの談話より編集。



麗澤館正門前で



「麗澤館ガールズ」として各種イベントに参加

学生寮のあゆみ

——長年培われた伝統を守りながら、新たな体制へ

学務部長 田島正幸



2009年（平成21年）廣池学園創立75周年、麗澤大学開学50周年記念の年を迎え、その記念事業として、老朽化の進んだ校舎2号棟および学生寮1・5号館の建て替えと6号館の改修工事が実施された。寮の建て替えについては、従来の運営体制を引き継ぐ教育寮とし、寮教育の伝統を維持し、外国人留学生を入寮させ多文化コミュニケーションの基地としてのグローバル・ドミトリーを目指した。

こうして、2013年4月に完成した学生寮グロ―バル・ドミトリーは、新たな運営体制のもとスタートしたが、ここに至るまでの伝統ある教育寮の歴史を紐解いてみたい。

全寮制の学校としてスタート

1935年（昭和10年）本学の前身である道徳科専攻塾が廣池千九郎によって開塾、当時では珍しい男女共学の全寮制の学校であった。寮は、建学の精神であるモラロジーに基づく「知徳一体」を実践するところの教育寮であった。その後、4年制大学となった1959年（昭和34年）、大学校舎（後に校舎2号棟）と学生寮（1号館）が建てられた。なお女子学生には、麗澤館女子寮が使用された。翌年の4月に2号館、次の年の10月には3号館が続けて建てられた。1部屋は、4名で構成され学科、学年は

別々であった。各階には寮長、各部屋には部屋長と呼ばれる最上級生がいて下級生の面倒を見ていた。

1962年、1・2号館は男子寮として利用され、3号館は女子学生が利用した。1963年から学科の専門性を高めると同時に語学習得のため学科ごとに分かれ、男子寮1号館は英語学科、2号館には英語学科の一部学生と中国語学科、ドイツ語学科の学生が生活した。生活面だけではなく、学習面においても上級生による下級生への指導助言が行われた。

1966年と翌年と連続して入学者の増加があり、また男子各寮に研究室を設置するために居室の1室を転用することになり、その結果、1・2号館だけでは男子学生を収容できなくなったため、急遽、女子寮を建設することになった。この時点で入学者の男女別定員規模が検討され男子300名、女子100名（1学年男子75名、女子25名）をめどとすることが確認された。

1968年3月に女子寮として4号館が建てられ

ると、男子寮の1号館は中国語学科、2号館は英語学科、3号館はドイツ語学科と号館ごとに学科に分かれて生活するようになった。

新築された4号館は、教育工学やグループ・ダイナミックスの成果を踏まえた設計として、当時関係者の注目を浴びた。1部屋の中央に共同の居間があり、その居間を囲むようにして3・4の小部屋が併置され、それぞれの小部屋には2段ベッドと机、ロッカーが設置された2人部屋であった。6から7人の寮生がある程度のプライバシーを保ちながら共同生活ができる構造であった。

その後、学科ごとの寮は、専門性を高め語学の習得に役立ったが、寮生より他学科との交流がなく、学科ごとに孤立しがちな傾向に対して反省の声があった。賛否両論の議論を重ねた末、10年目にして学科の専門性を部屋に残して、他学科との交流を寮内で促進するという寮編成に変えることとなった。

こうして1972年4月から部屋単位では学科別であるが、寮編成では学科をミックスした寮体制に変

更になった。

同時に、男子寮は1部屋4名から3名に変更された。これは、生活水準の向上に伴い寮生の所有物が増え、4名では手狭となったためであると記録されている。

麗澤日本語学校が1972年設立され、外国人留学生が本学に入学するようになった。当初は外国人留学生の女子学生が少なかったということもあり、女子寮には各部屋に一人ずつ入寮、男子学生は3号館の一角に日本人寮生とは別に居住していた。その後、男子寮も留学生と日本人学生と一緒に生活する混合にしてはとの意見が出て寮会議などで議論した結果、1975年後期から男子寮も日本人学生と留学生が混在して寮生活を営むようになり、現在の国際寮としての学生寮がスタートした。

1974年には女子入学者が増えたため9月に女子寮5号館（1階）が新設され、翌年12月には2階部分が増設された。

個室・ユニット制へ、全寮制の廃止

1982年には、学生数の増加と女子学生の比率が高まってきたこと、個室制の要望などから6・7号館（5階建、個室制）が建てられ男子寮として利用した。なお個室制によるまとまりのなさを補うため、8室を単位としてユニット制が設けられた。この年から寮体制は個室・ユニット制に移行、寮長を中心としてユニット長（ユニ長）が補佐するという運営体制となった。そのため、この6・7号館も改修し、1988年には入学者の男女比の変化によって女子寮となった。

全寮制については1985年度から廃止され、従来の4年間の全寮制度から2年間の全寮制度へ移行し、通学生が導入された。これは入学者の中に高校時代に寮生活経験者が増えていること、通学圏からの学生の増加が多くなったこと、多様な生活経験への要望等によるものであった。さらに、2年後には1年間の全寮制となった。ただ3・4年次生でも希

望すれば寮に余裕のある限り残留できたので、これまで通り寮長を中心とする寮体制に変更はなかった。その後、1991年には年次ごとの全寮制が廃止された。

2013年新たな寮体制へ

——フロア・リーダーとユニット・リーダー制に

本学の伝統的な教育施設である寮建設については、委員会などで検討が重ねられ、また当時の寮長始め寮生の意見も多く取り入れられて設計された。

各階4つのユニットからなる新寮は、それぞれのユニット・ルームには、ユニット内の寮生が歓談できるグリーン・ビュウ・ラウンジ、キッチン、トイレ、シャワー室などを設け、取り囲むように6つの個室（机・ベッドなど）が配置された。

なお、新寮は4・5号館を取り壊した跡地に建設された。1号館は部室棟として生まれ変わり、2・3号館は取り壊された。6号館は改修工事を施して1・2階を男子寮、3・5階を女子寮とする男

女共用の棟とした。

こうして2013年4月から新学生寮での新たな寮体制がスタートした。新学生寮グローバル・ドミトリA棟とB棟には女子学生が、C棟には男子学生が入寮した。なお6号館はD棟と名称を変えた。

新たな寮体制は、伝統を受け継ぎながら、これまでの寮長を中心とした体制からユニット・リーダーを中心とした体制に移行した。これまでは寮長が多くの寮生をお世話してきたが、一人ではなかなか目が行き届かないこともあり、また寮長の負担を軽減する意味もあった。各階は4ユニットから構成され、1ユニットは6人で、その中の一人をユニット・リーダーとした。ユニット・リーダーは寮長と同じように、その部屋のメンバーの世話をすることにしたが、目が行き届きやすく交流も一層深まった。寮全体については各階のユニット・リーダーの中から選ばれたフロア・リーダーが連絡・調整係として行事の企画や打ち合わせをするようにしたが十分に機能できなかったとして、寮生からの申し出に

よりフロア・リーダー会議も適宜行うことになった。
寮における行事

1959年度当初は、学校行事そのものが寮行事となっていたが、翌年からは寮対抗のソフトボール大会、一日旅行、映画会、遠歩きなどを実施。1961年に入ると7月に寮祭が行われ、寮対抗マラソン大会なども実施されるようになった。寮祭は、その回ごとにファイヤーストーム、盆踊り、模擬店、各寮からの出し物や仮装、寸劇など工夫を凝らしたお祭りとなった。年によって体育祭（スポーツ大会）と合わせて2日間実施され寮生同士の団結や交流に役立った。寮祭は、ほぼ毎年開催され、「たのしんで寮祭」「魅せられて寮祭」「ヨイシヨで寮祭」「トロピカリテ寮祭」「いきなり寮祭小町ドキッ！」などのテーマを設けて寮生が中心となって企画・運営し一般学生を巻き込んだの一大イベントとなった。現在では、寮祭に替わるものとして寮対抗のスポーツ大会などが開催されている。新たに

花見会、バーベキュー・パーティー、ハロウィン・パーティーやクリスマス・パーティーなどが親睦のための行事として開催されている。

寮教育の一環として長年実施されている新旧寮長引き継ぎセミナー（現在はユニット・リーダー引き継ぎ会）は2月に開催、寮長セミナー（現在はユニット・リーダーセミナー）は3月に2泊3日の日程で谷川セミナーハウスにおいて開催されている。また、毎月1回開催されている寮長会議（現在はユニット・リーダー会議）も教職員が参加している。これらセミナーなどの企画・運営をユニット・リーダーが中心となって自主的に実施、教職員も一体となって支えている。

寮は、その時々で寮体制などの形は変えながら、また行事なども名称や場所、開催日などの違いはあるものの、長年培われた寮の伝統を受け継いでいくとする寮長、ユニット・リーダーを教職員が支えながら変遷を遂げてきた。この新たな体制も寮の伝統を維持しつつ、滑り出したところである。

特集 2

50回を迎えた 麗陵祭



麗陵祭実行委員会の3年間で培ったこと

第50回麗陵祭実行委員会委員長

小澤桃子

(英語・英米文化専攻3年)



リーダー未経験の私が、麗陵祭実行委員196名のリーダーになるとは思ってもみませんでした。

私が麗陵祭実行委員会に入った切っ掛けは、先輩たちからの勧誘と友達が入るからという軽い気持ちからでした。1年生で広報局パンフレット班に所属しましたが、そこは私の希望ではなかったため一時期は辞めようと考えていました。しかし一つの出会いが私の気持ちを大きく変えてくれました。当時、パンフレット班班長だった先輩のリーダーシップを尊敬し、2年生でその班長を務め、そして迎えた3年目。私は自分の可能性を広げられることに期待し、「小澤桃子」なりの委員長になろうと決意し

ました。それは、麗陵祭実行委員会の3年間で培ったこと、心掛けたことを伝えたかったからです。

麗陵祭実行委員会は本部と装飾局、企画局、総務局、対外局、広報局の6つの部局から構成されています。毎週月曜日に各局会議が行われ様々な話し合いを繰り返します。さらに毎週水曜日に麗陵祭実行委員会の最終決議機関であるTOP会議と呼ばれる場で各局のリーダーが集まり、意見交換や各局で練った提案書・企画書等の審議や承認を行います。その他にも、授業の空き時間や放課後等を使って毎日のように活動しているメンバーも少なくありません。おそらく、みなさんの想像を超える時間と量の作

業を費やしてきました。よく友達に「委員長って忙しそうだし大変そう」と言われました。その通りです。それに対して「忙しいは大変だけど、楽しいから頑張れるよ」と答えていました。これも本音です。周りから見ても重役である委員長に就任したことは、私にとって大き過ぎる決断であったと同時に人生のターニングポイントになったと言っても過言ではありません。正直、最初は委員長という大役を務めることには自信がありませんでした。それは、パンフレット班班長の頃に培った経験が大きく、自信を与えてくれたからです。ある程度仕事量をこなせる力は身につけていました。

しかしパンフレット班班長と委員長とで一番大きく違った点は、仕事の対人規模でした。正直、パンフレット班班長の頃、持ち分の仕事をこなしているだけで班員6名をまとめられていたかというところではなかったと思います。そんな状態で196名をまとめられるのか、とても不安でした。ここでまた、私を前進させてくれたのは前委員長から受け継

いだ「委員長の学祭ではなく、みんなの学祭」という言葉でした。私は麗陵祭実行委員会のボスではなく、リーダーです。一人でみんなに指示をするのではなく、みんなの先頭に立って「一緒に」麗陵祭を創り上げたいという気持ちがとても強くありました。幸運にも、周りには頼れるメンバーが沢山いました。本部の副委員長・会計はもちろんのこと、各局局長は私にとってお互いに切磋琢磨し信頼できる関係でした。例えるならば、実行委員全体を森とし、196名一人ひとりを木とします。私は森を見て、各局局長は木を見るといったスタイルです。もちろん、私が木を全く見ていなかったとうわけではありません。委員長である私を実行委員一人ひとりを知ってもらえるよう日頃から声を掛けました。そうすることで、麗陵祭実行委員会の一体感が生まれ第50回のメンバーらしい麗陵祭が創れるような環境になるよう心掛けました。

第50回麗陵祭は実行委員196名とその委員長である私が一丸となって創り上げた、今までの麗陵祭

とも他大学の大学祭とも違う史上最高のものでした。麗陵祭は50年という長い歴史を持っており、そこにはこれまで麗陵祭の歴史を築き上げて下さった沢山の人の想いが詰まっています。

私たち第50回麗陵祭実行委員会は、これまで麗陵祭に関わって下さった全ての方々に感謝すると共に麗陵祭の歴史を皆で繋ぎたいと考えました。そして第50回麗陵祭を「史上最高のものにする」という想いの基、過去と現在そして未来を表す、「これまで、そして今から」というテーマを決定しました。

このテーマは第50回麗陵祭だけでなく、私の麗陵祭実行委員会3年間の軌跡に当てはめても大きな感銘を与えてくれました。麗陵祭実行委員会を続けるきっかけをくれたのは先輩であり、委員長を全う出来たことも先輩の言葉があったからです。その先輩

方に感謝すると共に、私らしい委員長を務めることが出来ました。これからは私が学んだことを次世代へ伝えることが使命だと思っています。そして麗陵祭実行委員会は、今年の第51回麗陵祭に向けて、既に歩み始めています。第50回麗陵祭テーマに込めた「今から新たな一歩を踏み出す」ことに挑戦し、また新たな麗陵祭を創り上げていきたいと思っています。こうした過去と現在、未来への繋がりの中で私は実行委員はもちろん、参加団体のみなさんや教職員の方々、地域の方々との交流で様々な刺激を受けり「ダー」を務めることが出来ました。それを感じることで出来るのは3年間を終えた今です。私は麗陵祭実行委員会の3年間で培った経験は、今後の人生の糧になることでしょう。

〈特集②〉50回を迎えた麗陵祭

「開かれた学びの場」を目指して

—— 黒須ゼミ公開討論会のこれまで、そして今から

学務部教務グループ 丸 優 泰



「伝統の黒須ゼミ討論会」

2013年11月、第50回麗陵祭にて行われた討論会に参加した方より、こんな言葉をいただきました。今や「伝統」となっている公開討論会のはじまりは、振り返ると、私が3年生の時、ゼミ初回授業の後に行った南柏駅近くの某居酒屋にて、「普段、黒須ゼミでやっている議論を学園祭で公開討論会にしてやってみたらおもしろそうじゃない？」という話題が出たことがきっかけでした。

「研究報告の一貫として」という意味を込め、「展示団体」として「黒須ゼミ公開討論会」が麗陵祭で

実施されることになった12年前のことでした。それが今や「伝統」となって、12年間、一度も途絶えることなく継続されていることに、ただただ驚くばかりです。これもご来場いただいている教職員の方々、近隣の方々、OB・OGの方々、保護者の方々、そして、黒須ゼミの後輩の皆様の支えがあったこそだと思います。

黒須ゼミ公開討論会のこれまで

さて、12年前の2002年度黒須ゼミでの「ホットな話題」は、まぎれもなく1999年に施行された「男女共同参画社会基本法」¹に関する話題でした。



麗陵祭での黒須ゼミ公開討論会

「女性だってバリバリ社会に飛びたつて働きたい」という意見、一方で、「やっぱり、女性は結婚して、家庭に入るのが夢でしょう」という意見とで白熱した議論がくり広げられていたことが昨日のこのように思い出されます。

こうして、「討論会元年」で私たちは、「男らしさ、女らしさって?」「結婚・離婚・子育てについて」「男女共同参画社会の実現について」といった、まさにその時代で最も注目されていたテーマで議論をしました。今回の2013年度のテーマが「グローバル人材とは?」、昨年度が「21世紀における平等と不平等」、一昨年度が「震災から考える私たちのIdentity」というように、この12年間の中でも黒須ゼミ討論会のテーマが、時代とともに変化していることにも驚かされます。これこそが卒業生や、保護者の皆様や、その他の社会人の方々まで巻き込んで、毎年、白熱した議論が巻き起こるゆえんと言えるのではないのでしょうか。

「開かれた学びの場」を目指して

前述しました学生時代「女性だってバリバリ働きたい!」と熱弁していた女性たちの中には、ここ4〜5年のうちで結婚し、母親となり、当時思い描いていた「将来像」と「今の自分の価値観」の変化に気づき、時に、「育児」と「仕事」との両立の大変さに悩み、時に、「母親として、夫と子供を支えること」に喜びを感じながら生きている者もいます。黒須ゼミには、こうした卒業生も足を運んで来ます。「当時の自分」と「今の学生」とを重ね合わせ、その卒業生たちは、経験を生かしたアドバイスや激励の言葉、さらには、「現役のゼミ生の学ぶ姿に感動した。刺激を受けた」という言葉を残していきます。

私も、「ゼミOB」として、2011年度から3年間、毎年恒例の夏合宿に参加しています。

そこでは、3年生を中心とした麗陵祭の公開討論会準備と、4年生による卒業論文の特訓が行われま

す。私はその中で「コマをいただき、「よりよい討論会にするために」というテーマでワークショップをしています。

合宿の中で、「司会になることも生まれてはじめてです」と不安や緊張でおどおどしていた先輩が、ワークショップを経て、また、4年生の先輩達の叱咤激励に後押しされて準備・練習を重ね、本番は堂々と司会進行や、討論会運営を務めあげ、翌年には後輩指導に当たるまでに急成長するのです。こうしたゼミ生の成長していく姿には、胸を打たれます。こうして、多くの方々に支えられて討論会が実施されてきたのは、2000年度の初代から受け継いできている「開かれたゼミ」という合言葉があるから、そして、黒須先生ご自身もいつも「開かれた学びの場を提供しよう」という姿勢で私たちと向き合われているからこそだと思います。

麗澤教育では、「師弟同学²」という精神が重んじられています。黒須ゼミにも、先生と学生、先輩と後輩、互いが学び合う環境があり、まさに「師弟同

学」がゼミの中で体现されていると言えます。

こうした学び合いを日ごろのゼミ、学園祭の討論会での経験を積み重ねることによって、国、文化、時代、家庭環境など、異なる価値観や、異なるアイデンティティを持つ人たちと触れ合うことができ、それに伴い、一人ひとりに多角的な視野がついてくるのです。「視野が広がること」「異なる価値観やアイデンティティを持つ同士がつながること」にゼミ生たちが魅せられ、こうして毎年、黒須ゼミ公開討論会が伝統として受け継がれてきているのでしよう。

こうした「開かれた学びの場」が麗澤大学一杯に広がっていったら……

そんな想いを抱きながら、ワクワクしながらいつも学生さんを見えています。

(1) 男女共同参画社会基本法(1999年6月23日公布・施行)

「男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会」(「男女共同参画社会基本法」第2条)を旨とし制定された法律。

(2) 師弟同学「教師と学生が共に学び合う姿勢を大切に、世界の人々から信頼される品格を身につけた人材を育成する」という麗澤大学の教育方針のひとつ。

〈特集②〉50回を迎えた麗陵祭

12年経った今、麗陵祭を振り返って

本田技研工業株式会社

紀野篤史

(第61期 経営学科卒)



まずは麗陵祭50回おめでとうございます。今年

は麗陵祭実行委員会の大先輩川瀬達也委員長、後輩の丸知里さんのお誘いを受け、12年振りに麗陵祭へお伺いすることができました。久しぶりの麗陵祭は学生時代、特に麗陵祭実行委員会のことがい出され、とても懐かしく感じると共に、今年の麗陵祭はこれまでの諸先輩方が積み上げてこられた49年の実績に、一段積み上げ50回を飾る素晴らしい出来映えであったと先輩の一人として感じました。これも学生支援グループを中心とした大学のサポートのもと、今年の実行委員長、各部署の委員が一体となり、参加者と共に作り上げた結果であり、誇りに思

って良いものだと思います。

私の学生時代を振り返ってみますと、実行委員長として麗陵祭開催に向けて仲間と共に行動していたのは、もう12年も昔のことになります。当時の麗陵祭を通じての苦しみや喜びなど、今でも鮮明に覚えております。1年生から3年生までの実行委員約120名が「十人君色々みんなちがってみんないい〜」という麗陵祭テーマのもとに、個性豊かな麗陵祭の開催、成功に向けて努力をしまりました。

そして麗陵祭当日は晴天にも恵まれ、来場者は1万1686名と多くの方にご来場をいただき、多少の



トラブル（コンサート会場に使用した第一体育館の床が抜けたり……）はありましたが、何とか成功と言える結果を残し、麗陵祭を無事終了することができました。

その麗陵祭終了から遡ること丁度1年前に、私は翌年の麗陵祭を開催するための委員長として仕事をさせていただいておりました。私はこれまで、人との関係を築き上げ大きな仕事（目的）を達成したことはなく、ほぼ全てが未経験に近い状態からのスタートでした。前任の麻生浩史委員長の際は総務局で、前々任の長谷川浩之委員長の際は本部で一委員

として在籍していましたので、委員長の仕事については、「大変そうだ」くらいしか認識していませんでした。麗陵祭に関わっていた2年後に、まさか自分が委員長なるとは全く予想しておりませんでした。そんな私が麗陵祭の実行委員長に任命され、約1年間の活動を振り返って見ると、前任や前々任の各委員長と比べて決して優れた委員長であったとは言えなかったと思います。委員長として全体最適を考えた行動、目標に向かって進める動機づけ、仲間と共同で作りを上げる協調性など、いろいろな面に欠けるばかりです。しかし、委員長として麗陵祭に取り組んだ1年間、大学内外問わず、多くの人と関わり、多くことを議論し、多くの衝突をしながらも、無事、成功させることができた経験は、今の私の血となり肉となり今に活かしていると実感しています。

その理由を挙げればいくつもありますが、私が思う最大の理由は、麗陵祭実行委員会をチームとしてまとめて上げ麗陵祭を成功に向けて行動していくた

間的成長を期待する大学の学生に対する期待を込めた研修や日常のフォロワー活動であったと感じます。当時の学生課の松浦雄五郎課長にお話をいただいたことで、今でも鮮明に覚えていることがあります。それは「私たちが麗陵祭実行委員会に期待することは麗陵祭を成功させることではなく、麗陵祭を糧に皆さんが人間として成長してくれることです」という言葉です。当時、私は麗陵祭実行委員会の目標は麗陵祭を成功させることしか考えておりませんでしたので、大学の懐の深さにとっても感銘を受けました。

めに必要なことは、実社会の企業で活動していくために必要なことと同じであったということです。つまり、麗陵祭を成功させるという目標達成に向かい麗陵祭実行委員会のメンバー約120名が機能的に、本部、企画局、対外局、装飾局、広報局など6局に分かれ、役割を負い、各局長は人、物、金、時間、情報をマネージメントし各局の運営を行う。各局の集合体である委員会は委員長が同様にマネージメントを行う。局、班単位でリーダーシップ、フォローシップ、フレンドリーシップを発揮し、各人が能力を発揮できるように促す。また課題に対して各レベルでの議論を行い、必要に応じてトップダウンとボトムアップを行うことで課題を解消し目標に向かい推進する。これらの活動は企業活動で行ううえで必要不可欠なことであり、現在、私が業務を行ううえでも常に考え実践して行かなくてはならないことでもあります。

今の私が、松浦課長については大学の期待に応えられているか確信は持てませんが、私にとって大学時代の麗陵祭実行委員会での活動を通じて得た経験が成長の糧となり、現在の私の大切な基礎になっていることは紛れもない事実です。このような機会を得られたことに感謝すると共に、来年、再来年と学生たちが経験を積み、成長していく機会が与えられる麗陵祭が51回へと続くことに感謝したい。

さらに、今振り返ると、委員会活動など通じ、人

麗陵祭実行委員会は私の大家族

総合企画部企画広報室 片山大輔



大学の発展と共に歩み続けてきた麗澤大学学園祭（以降、麗陵祭と称す）は2013年に50回目の節目を迎えた。50回の歴史の中には卒業した学生一人ひとりの想いが詰まっており、学生たちは麗陵祭を通して結束力が高まり、大学時代を象徴する、まさに青春の1ページとなる。そのような麗陵祭に丸1年かけて準備に取り組み、青春を注いでいるのが麗陵祭実行委員会である。

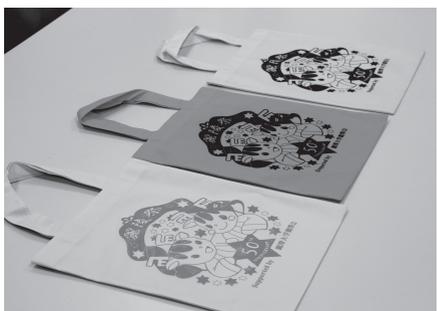
現在、私は麗陵祭実行委員会OB・OG会の会長を務めている。私自身も学生時代に麗陵祭実行委員会に所属していたこともあり、1回の麗陵祭を成功させる難しさ、そして終わった後の底知れぬ達成感

を経験してきた。麗陵祭実行委員会に1年間でも所属していればOB・OGとなり、現在約2000名近くが対象となる。OB・OG会は2000年に設立して以来、卒業後もOB・OG同士が再会できる場、現役生との交流を深め、物心ともに活動を支援することを趣旨として活動してきた。

近年の課題として、OB・OG会の認知度低下や世代を超えた縦のつながりの希薄化があげられる。私は会長に就任して以来、OB・OG会を卒業後も帰って来ることができるよう家族のようなコミュニティとなることを目標としている。学生時代の思い出や仲間と語り合うことで落ち着いた気持ちになるのは

私だけではないだろう。そのような心が落ち着ける居場所が今も変わらずにあることを伝えたいと思いい、第50回麗陵祭をOB・OG会の改革を図るターニングポイントとして位置づけた。

まずは、OB・OG会から有志の協力者を募り、「あなたの想いで麗陵祭を彩ろう」というテーマのもと、彩りプロジェクトというチームを立ち上げた。彩りプロジェクトでは、麗陵祭マスコットキャラクター「れいたくん」の生みの親であるOG、現



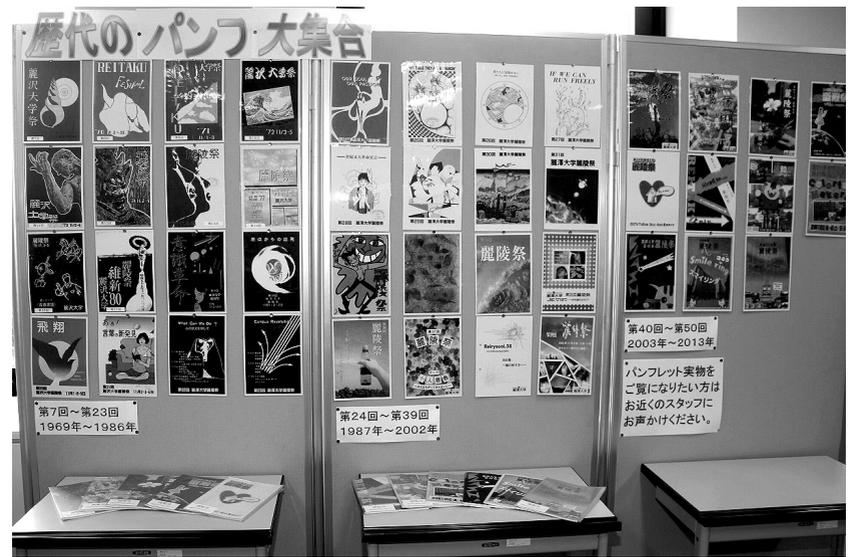
第50回記念エコバック

役生とOB・OGをつなぐ人望のある第49回麗陵祭実行委員長など、第38回から第49回までの幅広い世代に跨る6名のメンバーで2月より始動した。月に一度の打ち合わせを重ね、OB・OGの私たち

も第50回麗陵祭を創ることができるといふ点を軸に2つの企画を立案した。

一つ目は、OB・OGによる来場者配布用「第50回記念エコバッグ」の制作だ。エコバッグ制作にあたり、OB・OGに協力金を呼びかけ、集まった金額に応じて制作枚数が決定する仕組みだ。仕事、結婚、育児、引越など、様々な理由で麗陵祭に足を運ぶことはできないが、第50回麗陵祭の活性化に一役買いたいという声を多くいただいた。賛同の声は大学の同窓会組織「麗澤大学麗澤会」にも拡がり、100名以上の方々からの支援を受け、計3000枚制作することができた。この場を借りて御礼申し上げます。

麗陵祭ではその年ごとにテーマを掲げており、第50回テーマは「これまで、そして今から」という過去の麗陵祭に敬意を表し、これからの発展に誓いを込めたテーマであった。現役生との話し合いを経て、過去から現在までの麗陵祭の歩みをまとめる「50回の歴史を振り返る記念展示」を二つ目の企画



歴代の麗陵祭パンフレット

とした。過去の取り組みを調べるにつれ、毎年、工夫の凝らされた企画が練られていたことがわかる。また、麗澤大学の変化も激しく、校舎の建て替え、全寮制の廃止、学部増設による学生定員の増加など大学の変化に応じて麗陵祭も姿を変えてきた。歴史を知ることその時代を生きた学生の大学生活にかけてきた想いが伝わり、感慨深いものが湧いてくる。さらに、過去の麗陵祭をいろいろな視点から見るためにOB・OGから学生時代の写真提供を呼びかけた。その他にも、OB・OG 50名による第50回麗陵祭への祝福メッセージや麗陵祭の年表を展示。麗陵祭期間中は彩りプロジェクトのメンバーが展示の説明を務めていたが、参加団体の目線に立つことで様々なことに気づくことができた。

大学祭といえば、学生が中心というイメージであったが、一般の方が多く足を運んでいることが印象的であった。近隣に生まれている方、学生の保護者、毎年展示を楽しみにしている方々が麗澤大学に訪れていることを肌で感じた。麗陵祭とは、学生一

人ひとりが生き生きとした表情で準備にあたり、麗澤大学が最も活気に満ち溢れている一日。そして、知の財産や課外活動の成果をはじめとした麗澤大学の教育を社会に伝えていく大切な機会だと改めて感じた。

今回の彩りプロジェクトの2つの企画は、麗陵祭の認知度を学内外ともに高めることに大きく貢献できたといえる。そして、現役生とOB・OGが企画の立ち上げから関わったことで双方の距離が縮まったことは一番の成果であったと思う。特に夏に開かれた現役生のための激励会では30名ほどのOB・OGが駆けつけ、これまでとは一味違う交流会となった。

その他にも実行委員が一堂に会する全体会議で50回の歴史を振り返る特別講話を実施。同窓会の開催や物資のサポートに留まらず、縦につながり現役生の活動に貢献できたことはOB・OG会の改革の第一歩が成功したといえるのではないだろうか。現役生と共に活動することで学ばせていただいたこと

が多く、今後も彼らとの出会いが続いていくことが楽しみである。そして、麗陵祭に青春を注いだ彼らも、卒業後、仕事や家庭など新しい生活がスタートする。

私たちは日々の多忙な生活で追われてしまいがちだが、母校という、落ち着ける場所が自分にはあるということはお金では買うことのできない本当の財産ではないだろうか。現代の日本は、東日本大震災や伊豆大島の被災など天変地異が後を絶たず、日本経済も日々変化の激しい時代となっている。このような時代だからこそ、私たち一人ひとりの心をつなげる何かが必要ではないだろうか。

私は麗陵祭実行委員会OB・OG会を、麗陵祭という一つの絆で結ばれた大家族だと考えている。これから先も麗陵祭は大学と共に発展し続けていくだろう。これまでの麗陵祭を築き上げてきた先人たちと同じように、麗陵祭が学生一人ひとりの生き生きとした姿を映し出していくことを期待したい。

麗澤でしか作れない「絆」を実感した熱き3日間

——キャリアセンター『大人のBAR』

学務部キャリア支援グループ課長

長谷川善仁



何年越しの企画だったのだろうか。例年、麗陵祭が終わるたびに「来年こそは……」とチームメイトと語り続けてきた企画。

キャリアセンターでは、「大人のBAR」を初出店しました。

今回の麗陵祭が50回目の記念祭となること、ホームカミングデイが併催されることが、キャリアセンタースタッフ全員の背中を、ポンと前へ押ししてくれました。

大学の学園祭に、事務局の一部署が出店することは、恐らくとても珍しく、もちろんわれわれキャリアアセンタースタッフの誰もが、教職員となつてから

の出店は、初体験でした。

このBARでは、卒業生をメイン顧客に設定。卒業生同士のたまり場、語り場はもとより、卒業生と教職員の再会の場、更には、卒業生と在学生の交流の場を提供することを意識して、まだまだ暑い日が続く9月頃から、店づくりの企画を開始しました。もともと愉快でお祭り好きなスタッフが揃っていることから、業務終了後の麗陵祭企画のミーティングでは、「せっかく卒業生が遊びに来てくれる訳だから、『新宿二丁目』界限にあるBARのように、笑って楽しんでもらえる接客をしよう」、「銀座の母、新宿の母のような、キャリアセンターらしく、

将来の職業を占う店にしよう」、「そんなお店では、笑いは取れない！」等々と、夜遅くまで楽しみながら知恵を絞っていました。企業訪問や1日ばかりの学生との個別面談をしながらの毎日では、到底十分な準備をする時間があるはずもなく……いよいよ開催日程が間近に迫り、怪しげなメイクや服装で接客する自分たちを想像するに連れ、幸か不幸か自

ずと現実的に考えるようになっていきました。最終的には、個人の音楽的趣味を押し付けるかのような「大人のROCK BAR」というコンセプトに落ち着きました。80〜00年代ロックのCDをBGMに、乾き物のおつまみと、ビール、日本酒、焼酎、ハイボールなどのアルコール類やソフトドリンクを低価格で提供する、極めてカジュアルな会員制（基本的には卒業生・教職員・在学生に限定）のお店として、麗陵祭初日の開店を無事迎えました。

蓋を開ければ……もちろん大盛況。多数の卒業生が、絶え間なくご来店。あつという間に満席です。きめの細かい就職支援に、定評のある麗澤大学キ

ャリアセンターとしては、当然と言えば当然の結果だったのかもしれない。

卒業生 「帰って来ましたよ。覚えてますか。お久しぶりです。」

スタッフ 「覚えてるよ。当たり前だよ。元気に仕事がんばってる？」

卒業生 「やっぱり楽しい仕事はないですよ。でも、がんばってますよ。就活ではホントお世話になりました。」

スタッフ 「今はどんな部署で働いているの。どんな仕事内容？」

このような具合で、就職活動中には悩みや苦しみを打ち明け、連日エントリーシートと格闘した場所で、卒業生とスタッフの会話はどんどんと弾んでいきました。

（このような会話が、就職支援をするスタッフにとつては、貴重な情報収集と勉強の機会になるといって



近況報告や応援メッセージを掲示

また、カップルや家族連れでのご来店の多いこと多いこと。麗大生カップルの多さに、驚きました。かつて就職支援をさせてもらった卒業生同士で来店

してくださったり、「産まれましたー」と子供を抱いて来店してくださった卒業生も大勢いました。このような様子で、あつという間の3日間は終了。3連休返上で営業したことから、「もう二度とやりたくない」と感じる程に肉体的な疲労感が残りましたが、「このBARは生涯続けたい、麗澤大学で就職支援の仕事に携わることができて本当に幸せだ」と感じられた人生最高の3日間でもありました。ところで、来店してくださった卒業生の多くには、写真を撮らせてもらい、その場で即プリントアウト。教職員や同窓生への近況報告や在学生への直筆の応援メッセージを書きいただきました。キャリアセンターのガラス壁面に貼ってありますので、ぜひご覧ください。麗澤大学で学ぶことへの希望が湧いてくることは間違いありません。



卒業生カップル



恩師とともに

二鳥！）
キャリアアセンターは、いつの間にか様々な年代の同期生や、在学中の部活動やサークルの仲間が待ち合わせをする場と化していました。そのような集団ができてしまったからには盛り上がりがない筈は無く、早速その場で激しい酒盛りと、懐かしい在学中の思い出話へとヒートアップしていきました。更に、店の前を通りがかった懐かしの恩師がその輪に加

わり、厳しくも楽しかった当時の授業の様子が再現されるなど、私がかたわって選んだ音楽などそつちのけで、いつの間にか笑顔と笑い声の絶えない、賑やかなBARに変わっていききました。
来店してくれたのは、卒業生や教職員ばかりではありません。先輩がどのような企業でどんな仕事に携わっているのか、関心を持つ在学生も多数ご来店。キャリアアセンタースタッフの仲介で、在学生と卒業生をカップリングし、就職活動で行われるO・B・OG訪問しながらに、卒業生と在学生の交流も行われていました。
アルコールの勢いもあつてか、自分が携わっている事業のやり甲斐を熱く語る卒業生。
「このキャリアアセンターは日本一だよ。活用しなきゃもったいないよ」と麗澤大学キャリアアセンターを褒めちぎる卒業生。
非常に照れ臭い瞬間でもありましたが、一人ひとりの就活生に誠心誠意向き合って応援して来てよかった、と強く実感させて貰う機会にもなりました。

麗陵祭開催一覧

年度	回	実行委員長	テーマ	英語劇	ドイツ語劇	中国語劇	日本語劇	文化講演
1959			(文化祭、高校と共同)		ザレインシュタインの陣営			
1960		岩田啓成		ジュリアス・シーガー	フアウスト			
1961				マクベス、幸福な泥棒	フアウスト	好兒子	やさかのおんば十字の印のあるところ	中山竹次郎 宗 武志
1962	1	原田光博	(第1回大学祭)	オセロ	フアウスト			3大学討論会 (高崎経済大学、上智大学)
1963	2	関谷龍夫		真夏の夜の夢	フアウスト	阿Q正伝	ひかりごけ	天野貞祐
1964	3	十川龍三 (旧姓:米倉)		ハムレット	フアウスト	阿Q正伝	太鼓	
1965	4	高田美孝 (旧姓:鳥)		ヴェニス商人	フアウスト	北京の空の下に	ドモウの死	前川誠一
1966		大谷謙之	(学祖生誕百年祭)	マクベス	フアウスト	好兒子		
1967	5	上田光男		月の出	アルト・ハイデルベルク	阿Q正伝		福田恒存
1968	6	村上 誠	孤立より脱却して歴史の一頁を我々の手で——主役は君だ	オセロ	たくらみと恋	茶館		嶺山政道
1969	7	植田修二	現状に挑戦し、主体性を確立しよう	リア王	ドン・カルロス	獲虎之夜	スガナレル、それから母は	久住忠男
1970	8	米倉佳吾	日常性への懐疑と思索から行動を	イーテアニアス王	フアウスト	同住的三人	地獄のオルフェ	林 雄二郎
1971	9	中村週次		キリスト	戸口の外で	西遊記	シンデレラ	西 義之

年度	回	実行委員長	テーマ	英語劇	ドイツ語劇	中国語劇	日本語劇	文化講演
1972	10	森脇貞雄	動と静	マクベス	肝っ玉おっ母とその子供たち	三国志	白雪姫	
1973	11	小谷典夫	われら麗大生	テムベスト	イエーターマン	太甜的蜂蜜	トロイの木馬	
1974	12	西本哲三	伝統と変革	ハムレット	謝肉祭劇	儒林外史		
1975		山脇龍彦	(モラロジー創建50年)	リア王	ロムルス大帝	寶娥冤	英語守劇	
1976	13	小畑直紀	原点に戻り新たなる前進を	ジュリアス・シーガー	ベーター・スクヴェンツ氏と6人の仲間	錯斬崔寧	阿里巴巴和四十大盗	鐘ヶ江信光
1977	14	犬上義人	結晶 '77	アセンスのタイモン	群盗	杜子春	夕鶴、白雪姫、狼と七匹の仔山羊	田中邦衛
1978	15	小出 努	青春建設	リチャード2世	ウイリアムテル	洋状元		
1979	16	松倉弘征	青麗——はばだけ20年	マクベス	アルト・ハイデルベルク	走れメロス		
1980	17	中井 浩	維新 80	アントニーとクレオパトラ	メッシーナの花嫁	新鳳陽		
1981	18	大月裕三	意識革命	冬物語	レオンスとレーナ	好兒子		内藤泰子
1982	19	小林敬和	原点からの出発	リア王	長靴をはいた北猫	王昭君		金谷 治
1983	20	中保高樹	飛翔——はばだけ無限の可能性に向かつて	トロイラスとクレシダ	たくらみと恋	珈琲店之一夜		
1984	21	岩田勝也	ああ言葉の新発見	リチャード3世	物理学者たち	梅雨		
1985	22	山口洋一郎	What Can We Do? ——心の創えを感じて	真夏の夜の夢	スパイアの喜劇	爸爸回家時		岩崎謙介 竹原 茂
1986	23	上原克文	Campus Revolution	ベリクリーズ	ハーメルンの鼠捕り	小井胡周		

年度	回数	実行委員長	テーマ	英語劇	ドイツ語劇	中国語劇	日本語劇	文化講演
1987	24	山本元太郎	Our soul, Our Passion	コリオレーナス		火車上の威風、 家庭大事		須藤甚一郎 栗元 勝
1988	25	後藤良介	The Times They Are A Changin'!	血縁の二人の貴 公子	小市民の結婚	尋找男子漢		釜本邦茂
1989	26	中山英一	僕たちに国境はない——We all are Friends	ロマオとジェリエ ット		紅白喜事	竹取物語	
1990	27	神山昌貴	If We Can Run Freely——も し、僕らが自由に走れるなら	ヘンリー8世		汽球遊戯	曽根崎心中	徳大寺有恒
1991	28	森 直樹	世紀末大革命宣言——Nothing less than borderless and endless	シンペリン	ピエロの学校	幸運女神		
1992	29	森 直樹	開花	ヘンリー4世	沈んだ鐘	快活的黄帽子	ドレックサー	オスマン・サンコ ン
1993	30	川瀬健一	出航	タイタス・アンド ロニカス、恋の骨 折り損	Himmelwärts ～天に向かつて～	禿禿大王	ジャン・ハイムーン	
1994	31	濱 孝修	創造	12人の怒れる男	ピーターパン			フクター中松
1995	32	川瀬達也	挑戦	ジェリアス・シー ガー	天使、ナビロンに 来る			大沢啓二
1996	33	服部浩之	共鳴	から騒ぎ、尺に は尺を	妖精の王様と人 間嫌い	好聴的故事		バトリック(DJ) 松田重三郎 彦摩呂 土田正之 佐藤初女
1997	34	濱 伸洋	Big Wave—Why don't you make it with us?	お気に召すまま	サーカス物語	美女と野獣		佐藤初女
1998	35	長谷川浩之	Leap forward——歩を踏み出 せ!	ヘンリー5世	幸せを呼ぶカッ ラ	小美人魚		

年度	回数	実行委員長	テーマ	英語劇	ドイツ語劇	中国語劇	日本語劇	文化講演
1999	36	麻生浩史	和～なごみ～ あなたにとつての 「なごみの場所」へ	オセロ	白雪姫	大迷惑		
2000	37	紀野篤史	十人君色——みんなちがってみんな いい	夏の夜の夢	サイテルボの 娘たち	BE HERE NOW		
2001	38	藤山岳士	向日葵——陽の射す方へ	ハムレット	鉄はいくらか			
2002	39	鳴原亜紀	きらり☆——輝け！一番星	じゃじゃ馬なら し	本気ありえねえ よ!!!	哪吒鬧海		
2003	40	中澤正幸	一期一会——40回目の出会い	ウインザー陽気 な女房たち	ピーターパン	春夜夢		
2004	41	水長顕仁	Fun Fun フェンフェー——第 41章開幕!!	ペリクリーズ	小市民の結婚	藍色の記憶		木村祐一
2005	42	増田昌義	美心伝心	ヴェニス商人	Aschenputtel —シンデレラ—	相約		
2006	43	富士貴生	"R"INK!——つながり	ラクス	点子ちゃんとアプトン	為了某人的夢想	サンタクロースが 歌ってくれた	
2007	44	小池 皓	愛m h♡me (アイムホーム)	人形の家	長靴をはいた猫			
2008	45	綾部真由	Road to ...					
2009	46	湯浅浩平	BIG BANG	ペレアスとメリ サント	ぶた飼いの王子	軌跡～西遊記?～	総本の中の HERO	
2010	47	椎谷大一	Colorful Makers	三銃士	ラズンツェル		ヒトミ	JOY
2011	48	高橋正樹	FLASH!	テンバスト				杉浦太陽
2012	49	高安美紗稀	Smile ring スマイリング	レミゼラブル		白雪公主～中国 語版白雪姫～		大島麻衣
2013	50	小澤桃子	これまで、そして今から	冬物語	銀河鉄道之夜			



入学式 (2013.4.2)



留学生歓迎懇親会 (2013.4.26)



別科日本語研修課程秋季期入学式・特別聴講生開講式 (2013.9.10)



第3期生「全米模擬国連大会」に挑戦 (2013.10.25~27)



第50回 麗陵祭 (2013.11.2~4)



ミズーリ大学と品性教育に関する共同研究 (2013.4.8~10)



第25回「1泊2日の体験入学」に88名の高校生が集う (2013.8.4~5)



タイ・スタディツアー (2013.8.21~30)



ボストン大学でシンポジウム (2013.9.24~27)



麗澤大学・国土交通省の共催の公開セミナー「金融危機は防ぐことは出来るのか？」 (2013.10.18)



留学フェア (2013.10.24)



ベトナム国家大学と包括協定を締結 (2013.11.7)



第25回 麗澤大学英語教授法セミナー (2013.11.9)



国際交流もちつき大会 (2013.12.6)



マレーシア国立サラワク大学より研修団が来学 (2013.12.2~9)

展示・企画へ込めるおもてなしの心

総務部総務課主任 三宅哲治



第10回目となるホームカミングデイが2013年11月3日(日・祝)に開催され、約320名(卒業生約250名、在学生、名誉教授、教員OB・OG、教職員約70名)が母校に集いました。今年に記念すべき第50回麗澤大学麗陵祭との同時開催となり、節目となる記念すべきイベントとなりました。今回のテーマは麗陵祭と同じ「これまで、そして今から」を掲げ、展示物の準備および企画の実施を行いました。このテーマには「これまでの歴史を刻んできた沢山の人たちの思いを、自分たちの思いや感謝と共に、麗澤の歴史を皆で繋ぐ。そして、今から新たな一歩を踏み出し、史上最高のものにする」という思いが込められております。

テーマに恥じぬよう母校に集う卒業生一人ひとりの笑顔が見られるようメンバー一丸となって考えました。その結果、今年度(2013年度)は予想以上の来場者数となり、会場から人が溢れてしまうぐらいの大盛況となりました。

まずホームカミングデイとは麗澤大学の卒業生を対象として年に1回開催される行事です。卒業生に母校の現状を紹介し、教職員や在学生との親睦、交流を通じて母校との絆を深めてもらうと共に、卒業生組織である麗大麗澤会との連携をいっそう強化することを目的として開催しています。青春時代を過ごした母校に戻り、再びあの頃の熱き思いにひたる喜びの日にして

いただき、秋の1日を学生時代に戻ってゆっくりと振り返る。そして母校の教育の現状を十分に実感し楽しんでもらい、有意義な1日を過ごしていただきたいという願いが込められております。

2013年度のホームカミングデイは6つの展示企



画と、みんなが喜ぶ4つの麗陵祭への参加促進企画を実施しました。

展示企画としては①第1回〜第9回までのホームカミングデイの歴史を展示、②平成24年度〜現在までの本学の現状を展示、③教員の写真および卒業生に向けたメッセージを展示(名誉教授も含む)、④第40回〜第49回麗陵祭のパンフレット展示、⑤平成16年〜現在までの大学・大学院パンフレットの展示、⑥各年度の卒業アルバムの展示を行いました。

特に教員の写真および卒業生に向けたメッセージ展示ではおもしろいものが仕上がりました。多くの先生方にご協力いただき、できたものですが、写真やメッセージに各先生方のお人柄が出ていました。ある先生は海外での写真、ある先生は子供やお孫さんと撮った写真、またある先生は似顔絵やゼミ生と一緒に写真など、見ていて楽しく幸せになる写真やコメントが多く、大変充実した展示となりました。ただ残念だったのは全員の先生方からはいただくことができなかったことです。そのため、ある卒業生が「僕のゼミの先生



のが展示してない」と呟かれたことでした。

麗陵祭への参加促進企画としては①麗陵祭で使用できる食券（1人1000円分）の配布、②麗陵祭の展示への促しとしてスタンブラリーの実施（参加者には麗澤ニューグッズである輪島特産のお箸をプレゼント）、

③キャリアセンターとの連携、④グッズ販売をフリーマーケット会場で行うというものでした。

今回の狙いは3点でした。1点目はホームカミングデイに参加して頂いた方に楽しんでいただくことと、喜んでいただくことです。まさに「お・も・て・な・し」の心です。2点目は10回という数字にこだわりました。ホームカミングデイが第10回目という単純な理由もありますが、また20回目、30回目とこの麗澤大学ホームカミングデイが無事に未来に向かって続くように、今回の麗澤祭テーマ「これまで、そして今から」に合わせてこだわりました。3点目は第50回麗陵祭との同時開催であり、コラボして行っているという点です。以上のポイントを重視して企画を立案しました。

特に「おもてなしの心」は2013年の流行語大賞にも選ばれましたが、展示企画に当て嵌めると次のようなことになるのではないのでしょうか。まず相手の立場に立って、心温まる対応をするのが原点だと思いません。相手が満足することで、もてなす側も喜びを感じ

る関係にあり、こうした相互関係によって「美しさ・温かさ・楽しさ」を感じることが出来る。そのためには、職員一人ひとりが「おもてなしの心」を持つて行動することが、豊かな人間関係を築くとともに、良いホームカミングデイが出来るものだと思います。

ちなみに、私は麗澤大学に奉職して今年で5年目になります。まだまだ大学業務での経験は浅いのですが、前職では小売業をやっておりました。そこではお客様と接する時間が多くあり、貴重な経験をさせていただけました。感謝の手紙をいただいたこともあれば、商品クレームへの対応で雨の中、土下座をさせられた等の辛い経験も沢山あります。そのようないろいろな経験から大きく成長することが出来ました。そこでの経験も踏まえて、これが理想のイベントであり展

示及び企画だと思っております。それは「思い出し、いつまでも心に刻む」ことができるイベントだということです。参加者に次の5つの心を刻むことができるイベントを目指さなければいけないと考えております。1つ目が、またこの場所へ来たいと思う心。2つ目が、またこの人に会いたいと思う心。3つ目が、またこの人と話したい、話を聞きたいと思う心。4つ目が、誰かに話したり、知らせたいと思う心。そして5つ目が、誰かを連れて来たいと思う心です。

2014年11月2日（日）に第11回のホームカミングデイが開催されます。みんなが「おもてなしの心」を持ち、今年度を上回る企画・展示を行い、麗澤大学に帰ってきてくれた方を温かく笑顔でお迎えしたいと思います。

思い出に残るフィナーレを開催

学事部教育研究支援グループ 岡野正樹



平成25年（第10回）ホームカミングデーの最後を飾るフィナーレが11月3日（日・祝）の午後、大学校舎「かえで」の会議室を会場に開催され、廊下にまであふれ、予想をはるかに超える多くの卒業生、在学生、教職員等が集いました。

会場には、10回目を記念して、過去10年間のホームカミングデーの写真をはじめ麗陵祭パンフレット、卒業アルバム、「大学案内」などの展示、更には教員から卒業生に向けたメッセージなどが写真入りで飾られ、懐かしい写真を見ながら恩師、先輩、旧友と和気あいあいと語り合っている参加者たちの光景の輪が随所に見られました。そこには、懐かしい思い出とともに

に、再会を喜び合う笑顔であふれていました。

フィナーレの開催では、はじめにホームカミングデー委員長の井出元学長補佐からは「現在の麗澤大学、学生たちの『進化』を是非見ていただくとともに、根底に流れる『麗澤の精神』は変わらざることにも知ってほしいと思います」と、続いて中山理学長からは「学生時代の友人に会い、気持ちも記憶も一気にその当時に戻りました。麗澤ならではの温かい人間関係が続いていることを再確認できました」との挨拶がありました。

さらに麗陵祭実行委員会委員長の小澤桃子（英語・英米文化専攻3年）さんからは「『これまで、そして今

から』のテーマに基づいて、実行委員会を中心に在学生一同頑張ってきました。一緒にホームカミングデーを盛り上げることができて嬉しいです。私も卒業したらホームカミングデーに参加します」と、それぞれ挨拶がありました。

続く乾杯の挨拶では、麗大麗澤会の楠田正義会長（麗澤22期）から、江戸時代の儒学者である佐藤一斎の言葉を取り上げ、「来るべき未来に向けて、皆さんと一緒に頑張っていきましょう」と力強い挨拶を添えて乾杯があり、歓談に入りました。歓談の途中では、4名の卒業生から大学時代の思い出や卒業後のエピソードなどのスピーチをいただきました。

会の終盤には、ちょうどこの日（11月3日）の朝発表になった平成25年秋の叙勲で「瑞宝小綬章」を受章された楠田会長に参加者からお祝いの花束の贈呈がありました。恒例により、最後に参加者全員で記念撮影。さまざまな年代の人々が一枚に収まった様は、「麗澤の絆」の強さを表しているようでした。



グッズに想いを拓して

グッズ作成への想い

鈴木麻衣子

(学務部キャリア支援グループ)



今年で10回目の開催となるホームカミングデイ。今年も準備の段階から、多くの卒業生(目標は200名超)がお越しいただけるよう、広報をはじめ、グッズ作成面からも気合を入れて取り組んだ。

グッズは、老若男女が手にした時、「もらってよかった」「こんなグッズなら来年も欲しいな」と思っていただけのものを……という気持ちから、自分ももらった何が好きだろうか、どんな商品ならお金を出

してもいいかと消費者(もらう側の)意識で考えた。もちろん、今までもその気持ちであったが、改めて考え直し、もらっても使われないようでは、本当にもらって嬉しいものなのか、デザインはどうであれ、実用的(非常用グッズ等)であればいいのか……など、いろいろと考えた。そんな中、ホームカミングデイ委員会で数多くのグッズ案が挙げられ、どれも「いいね」と思えるものばかりであったが、投票の結果、お箸と耳かきがトップ1、2となった。お箸と耳かきには、提案者の気持ちがよく込められている。叶うのであれば、ぜひ提案者のグッズへ寄せる想いをご覧いただき、そして手にしていただきたい。

グッズ作成や販売を通じて感じたことは、グッズやサービスをこちらから提供するだけでなく、我々スタッフも卒業生やグッズを購入してくださった方から、「想い」を受け取ったということである。

個人的には、今年度より委員となり(前年度まで事務局)、発言権を得られ、事務局時代とはまた違った充実した日々となった。委員となったこの年、麗陵祭またホームカミングデイの記念年であり、参加者も200名を優に超える会となったこと、また委員長以下メンバーに恵まれたことを誇りに思う。

○○○○○

お箸への想い

井上貴広

(学務部学生支援グループ)



「私の時代、オリジナルのお箸は職人しか作れなかった。もちろん、手に入れることも困難であった。」ホ

ームカミングデイに参加された方から、たまたま耳にした言葉だ。当たり前のように、大量かつ素早く作成できる時代に生まれた私にとっては、非常に感慨深い言葉であったが同時に、反省もした。メールや電話で、大量のお箸を発注したが、そこに私は、どのような心にかけていたのだろうか。つまり「仕事」としてしまっていた自分に気付いたのだ。もちろん、少しでも良いものを、記憶に残るものを、という気持ちは強く持っていた。だからこそ、業者の選定も、デザインにも、妥協は無かった。足りなかったのは、受け取った方の笑顔を想像する事だったと、ホームカミングデイ当日に感じていた。

しかし当日、嬉しそうに受け取って下さる方々を見て、反省と共に喜びへと変わった。受け取った方々がどのようなお箸を使用してくれるのだろうか。そう考えると、楽しかった。普段の食卓に、お昼のお弁当に、それとも来客用に。多種多様な形で役立ってくれよ、と願いを込めた。お箸を見て、麗澤大学の事を思い出すきっかけになれば、と強く願う。

耳かきへの想い

吉田健一郎

(経済学部助教)



「ふくろう」とは言わずと知れた鳥類の一種であり、その可愛さとは別に次の意味合いを持つ動物として知られ、置物を代表格として様々なグッズに取り入れられている鳥でもある。

- ・福来郎…「福が来るように」という願いを込めて。
- ・不苦勞…「苦勞をしないように」という願いを込めて。

今回ホームカミングデイにおいて製作した「ふくろう耳かき」には、上記の想い(苦勞知らず・福を招く)が込められている。とりわけ、様々な福の中でも、われわれが重視したのは「恋愛運」と「健康運」の2つであり、それぞれの運を込めた2種類の耳かき

を製作することにした。ホームカミングデイには様々な年代の方が参加されるため、ライフステージに合った「福」が必要であるという結論に至ったわけである。すなわち、既婚者で比較的高齢の方は「健康運」

のふくろう耳かきを、まだ年若く良い縁に巡っていない方には「恋愛運」の耳かきを選択してもらえたら嬉しいというのがわれわれの狙いであった。本当に、われわれの意図通りの選択をされたかは不明ではありませんが。

ところで、2012年に麗澤大学では麗澤の森にふくろうの巣箱を設置したのをご存じだろうか？ 実は「ふくろう耳かき」に込められた想いはもう一つあり、麗澤の森にふくろうが飛来し、ひいては「本学園に永続的に福が来るように」というわれわれの熱い願いが込められているのである。

グッズ販売への想い

佐藤なみ子

(学事部大学院・オープンカレッジグループ)



ひときわ目立つ「麗澤大学」のグリーンの旗を立て、フリーマーケット会場で「麗澤グッズ」を販売した。「麗澤大学」あるいは「Reitaku University」といったロゴの入ったグッズはホームカミングデイを重ねるごとに増え、今回は、37種類の商品を揃え販売した。今年一番の人気グッズは、持ちやすいと好評の三角軸のボールペンと手軽に使えるノック式の蛍光ペンだった。

物があふれているこの時代に、麗澤グッズの価値を見出し、購入してもらうにはどうしたらいいのか。自

分に問いかけ出した答えは、「グッズを手にとって学生時代の懐かしい思い出やホームカミングデイ、麗澤祭での楽しい時間を思い出し、あたたかい気持ちになつていただくこと」であった。

麗澤グッズのブースでは、グッズを手に取りながら大学時代の思い出話や近況報告をしてくれた卒業生、小さなお財布を首からぶら下げ、お小遣いで買ったグッズを両手に握りしめて嬉しそうに帰る女の子、「あれも…あ、これも持っているわ」と言いながら友人へのプレゼントとして麗澤グッズを購入してくれたご友人など、様々な方との触れ合いがあった。

麗澤グッズを通してお客様にあたたかい気持ちを届けてきたと同時に、お客様からもあたたかい気持ちをいただけたことに感謝したい。

Grand Get Together in 2013

株式会社オフテクス 永森久隆
 (第37期 イギリス語学科卒)



今年2014年で麗澤大学を卒業してから37年経ちます。自分ではあつという間に過ぎ去った感が強く、思い出してみると、全学生数がわずか360人の全寮制で、学生同士の触れ合い、交わりが強く、今思えば縦横の交わり方、距離間の取り方そして思いやりの気持ちを養う事が出来た大学生活でした。

在学中はゴルフ部、ESSそして英語劇の活動に注力しましたが、その中でも強烈な出会いはギャビン・バントック先生によってもたらされたものでした。英語劇、ESSの4年間の活動はバントック先生の個性に引張られて突っ走ったものでした。その演劇活動やクラブ活動の中、自分が好きな曲作りとギタ

ーを活かせ、詩人でもあるバントック先生から詞を頂き作曲し歌にする機会に恵まれた事は人生の宝物だと思っております。そして音楽活動は現在も続いており、作詞作曲、編曲、ギター演奏そして友人と共にCD作成をしたりしています。

最近では、友人である麗澤の卒業生の家族が集まり多種多様な楽器演奏から歌など年1回、発表の場を設け音楽を楽しんでいます。またバントック先生からの依頼で、昨年11月末に高知の明德義塾国際演劇クラブが公演した「East, West, Home's Best — John Manjiro in America」に音楽を提供させて頂いたりしています。大学を卒業後、英語劇活動の延長で同級生の深山敏



100名以上が集まり、旧交を温め合った大同窓会 (2013年7月13日)

郎さんから誘われ英語劇団フェステを立ち上げ、バントック先生と共に約10年活動しました。英語劇団フェステは麗澤大学の卒業生だけではなく一般募集 (Japan Times等の媒体を利用) をかけ、応募して下さった方々と共に、池袋にあるシアターグリーンという1000人入れれば目いっぱいとなるような劇場で年1回まとまった練習時間が取れるGWに公演を打っていました。GWを犠牲にして練習、リハーサルそして公演というハードな活動でしたが、皆若かったのか情熱を打ち込んだ事が想い出されます。そして英語劇団フェステの最後の公演から20年目が昨年2013年でした。

一般の大同窓会Grand Get Together in 2013のきっかけは、英語劇団フェステの運営費が銀行口座に残ったままとなっていた事でした。その残金の使い途をバントック先生、宗中正さん (麗大42期)、森川嘉之さん (麗大39期) たちと話し合った結果、連絡が取れるフェステメンバーから寄稿を募り、バントック先生が保管しておられた写真、ハンドビル、プログラムなどの情報を活用してフェステ活動の記録誌を作成しよう



中山学長、G・バントック先生を囲んで（大同窓会）

という事となりました。

その記念誌をどうやって出演者、関係者に渡せばいいのか話し合いを続けた結果、同窓会を開いて近況を語らいながら記念誌を配布して昔話に花を咲かせばどうだろうとなった訳です。すぐに委員会を結成し、事

たはずです。

田中駿平名誉教授および中山理学長のお話、パネルトーク（現役生およびOB）、バントック先生、トリキアン先生合作の名場面集のDVD上映、現役生による「テンペスト」の上演、劇マネージャー新旧混ざっての引き継ぎセレモニー（俗称、5円玉の儀式）等々とにかく盛りだくさんで、4時間が短く感じられてしまう夏の夜の饗宴となりました。そのオープニングにはフェステのテーマソングとして歌われた「Feste is Coming to Town」、クロージングでは「I Have a Longing」を澤田次郎さん（麗大47期）と一緒に演奏して歌わせて貰いました。両方ともバントック先生が詞を書いて私が曲をつけたもので、合同同窓会としてはピッタリの演出で会場全体で歌う事が出来、感動を覚えました。

会が終わってから有志で学生時代からコンパ、打ち

務方として菊前京子さん（麗大43期）、鈴木康子さん（麗大47期）たちの協力、記念誌の印刷、編集は宮原政志さん（麗大51期）をお願いする事となりました。しかし、英語劇団フェステは麗澤大学英語劇グループを母体としていた（フェステの公演の際にも英語劇グループから多大の協力を受けました。）ので、バントック先生の甥で現在英語劇グループを率いていらっしゃるトリキアン先生とOBにも声をかけて合同大同窓会を開催する事になりました。

さて、大同窓会は2013年7月13日（土）午後5時30分から、麗澤大学「はなみずき」（麗澤Café）で開催されました。バントック先生ご夫妻、麗澤大学諸先生方、フェステメンバー、英語劇メンバーのOBおよび現役生等を含め100名以上が集合し、様々なイベントを通して旧交を温めました。不思議なものでどれだけ年月が経っていても過去に時間を共有した友人たちとの再会は「じえじえじえ」の連続で、現役生の中に溶け込んでしまい、大学生に戻ってしまったような錯覚に陥ってしまったのは私だけではなかつ

上げ等でお世話になっていた（迷惑をかけていた、が正解かもしれません）三幸飯店さんに雪崩れ込み懐かしい中華料理に舌鼓を打ちました。マスターご夫妻も懐かしい顔が揃っていたので喜んで頂けたようです。

大同窓会を開催するまでに、実行委員間でのミーティング、メールのやり取りを通して参加する方々に喜んで頂けるようにプログラムの隅々まで気を配り考える、まさしく「おもてなし」の精神が発揮されて大成功となった事は実行委員の一人として大きな喜びでした。

最後になりますが、麗澤で学んだ事、身につけていた事は社会に出てからも十分役立ちます。後は個人の専門性を高めいかに社会の役に立てるような人物になれるかを卒業生、現役生がそれぞれの立場で考えて活躍の場を広げて行く事を願っています。

地域での活動を通じて見えてきたこと

勝間 翼
(経営学科1年)



私は、アイデンティティが確立されていく過程で既に「地域参加」が自分のテーマとなっており、少年時代から今日に至るまで、さまざまな活動をしてきました。現在、その活動は、市の審議会や刊行物の編集委員、NPO、学生団体、まちおこしイベントのスタッフ等々、多岐にわたります。

中学校時代は、周りの同級生が部活動に励んでいる中、私は毎週末のように、活動のために市役所や公民館などへ出かけていたという、少し変わった少年でした。中学生の私にとって、市役所は最初、馴染みの薄い場所でしたが、この経験があったからこそ、私は、両親や先生に加え、地域の人の温かさによって育てら

れてきたということを実感することができました。

そんな私は高校時代、草加青年会議所のお誘いを受け、「草加UC」という学生団体を立ち上げました。私はここで、自分の価値観が大きく変わる体験をしました。

UC (=United Children) とは、全国各地で中高生が自主的に設立している学生団体で、中高生が地域を舞台に自分たちが感じている問題意識を具体的なプロジェクトを通して解決していこうとする団体です。プロジェクトの中身は、環境美化や産業振興、国際交流への取り組みなど、地域の特色や参加する人たちの問題意識によってさまざまです。もとは2001年に静岡

県浜松市で立ち上がった団体ですが、現在では全国50以上の地域に広がり、それぞれのUCが独立して活動しています。

さっそく市内中学校からメンバーを集め、何かできることを考えた時、ちょうど東日本大震災から一年が経過した時でしたので、「東北の人を応援したい」という話になりました。ところが、自分たちが東北へ行ってボランティアをするにしても、東北まで行く交通費さえ調達するの

が困難で、さらに中学生もいる中で保護者の方々の理解を得るのも容易ではありません。

そこで、「地元で東北のためにできることはないか」

私はこの活動を通じて、実に多くの出会いがありました。個人商店の経営者、団体の代表者、政治家など。それだけでも高校生の自分としては貴重な体験となったのですが、何より私は、今までの活動が「受動的」であるのに対して、「能動的」に動くことの必要性に気づくことができました。これまでも、子どもキャンプの実行委員長や催し物の司会などを仰せつ



仲間と共に活動は広がる



活動を報じた地域紙（誌）

そこに参加していただけでした。ところがUCではそうはいかず、企画から運営まで自分たちで成し遂げなければなりません。

もちろん、色々な失敗体験もありましたし、意見が対立したこともありました。しかし、大きな視点で見れば、それ以上に、自分たちが努力して得られた成果を人様に分け与えることへの喜びは大きかったです。

での経験から、中高生がボランティアに親しみやすい環境を作るために新たな活動を始めることです。

たとえば大人たちが中高生へボランティアの大切さを説いても、その大人自身がボランティアをしていなければ意味がありません。また、自分で生活の糧を得ていない中高生が、経済的余裕が無い中でボランティアをすることにも限界を感じています。そこで私は、中高生が商店の模擬経営を通じて、その収益を社会へ還元していく仕組みを取り入れた活動を立ち上げようと、地域の方と相談しながら準備を進めています。世

おそらく多くの大学生は、社会に出たら勉強は終わりと考える人もいるかも知れません。しかし私は、生涯を通じて勉強していくことが必要だと感じています。これまでの活動を通じて私は、人は不完全であることを知りました。であるからこそ、失敗を常に謙虚な心で受け止め、向上していこうとする心が芽生えた時に初めて、人様のお役に立とうとする気持ちが出てくるのです。その時期が遅かれ早かれ、気づくことが肝要であると思います。麗澤大学の創立者・廣池千九郎博士も、最期を迎える間際まで絶えず勉学と人心救済に励んでこられました。この生き方こそ現代の私たちも見習わなくてはなりません。

私は草加UCを卒業しましたが、これから本格的に地域に関わっていくこととなります。現在、日本の生産年齢は急減していますが、地域においても同様に深刻な問題となっております。気が付いた人が率先して地域を支える為に行動していく必要があります。

私は、今後も地域での活動を継続していくつもりですが、今考えていることがあります。それは、これま

間では、大学での課外活動を重視するという声や、秋入学によるギャップイヤーを利用した社会貢献の必要性を問う論議もある中、私たちの世代から実態の伴ったボランティアをすることは次第に重要性を増してきています。私が目指すのは、ボランティアの実践を通して、形式的ではなく真に心の通った人とのつながりを広げていくところにあります。

今まで上の世代の人たちから受けた恩恵を、こんどは私が次の世代へバトンタッチする出番です。

編集後記

- ◆ 本号は「寮教育」と「50回を迎えた麗陵祭」を特集しました。
- ◆ 本学の学生寮は、創立者の理想を念頭に置き、人間教育を掲げる建学の精神を実現する場として存在しています。今回は、卒業生や現役学生の寮生活経験者の手記を掲載しました。「全人教育」をめざす本学の人間教育の実際を知っていただければ幸いです。加えて、寮生の約半数を占める外国人留学生と共同生活する、国際寮での寮生たちの、多くの「学び」や「気づき」にもご注目いただければと思います。
- ◆ 「麗陵祭」開催に向けて、毎年、200名近い麗陵祭実行委員会のメンバーが集います。2013年の開催テーマは、「これまで、そして今から」でした。特に今年は記念すべき第50回とあって、「史上最高のものにする」という熱い想いで、全員が、その準備にあたったと言います。そのメンバーたちには、過去の歴史（49回）を築き上げてこられた多くの先輩への感謝と、現在（2013年）を成功させよう、そしてしっかりと未来へ繋いでいこう、という目的と強い使命感が感じられます。
- ◆ ホームカミングデー開催も今年で第10回を数え、開催の想いは、麗陵祭と同じです。当日の開催と併せて、開催の企画・展示へ込めるおもてなしの心、グッズ作成への想いを感じ取っていただければ幸いです。
- ◆ 本誌の企画・編集は、井出元学長補佐を中心とし、企画広報室が行いました。本誌の内容に関するご意見、ご感想等がありましたならば、麗澤大学総合企画部企画広報室までご一報ください。

麗澤大学総合企画部企画広報室

『麗澤教育』第二十号

二〇一四年四月一日

編集 麗澤大学総合企画部企画広報室

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二―一―一

電話 〇四―七二七三―三〇三〇

印刷所 ベクトル印刷(株)

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー

